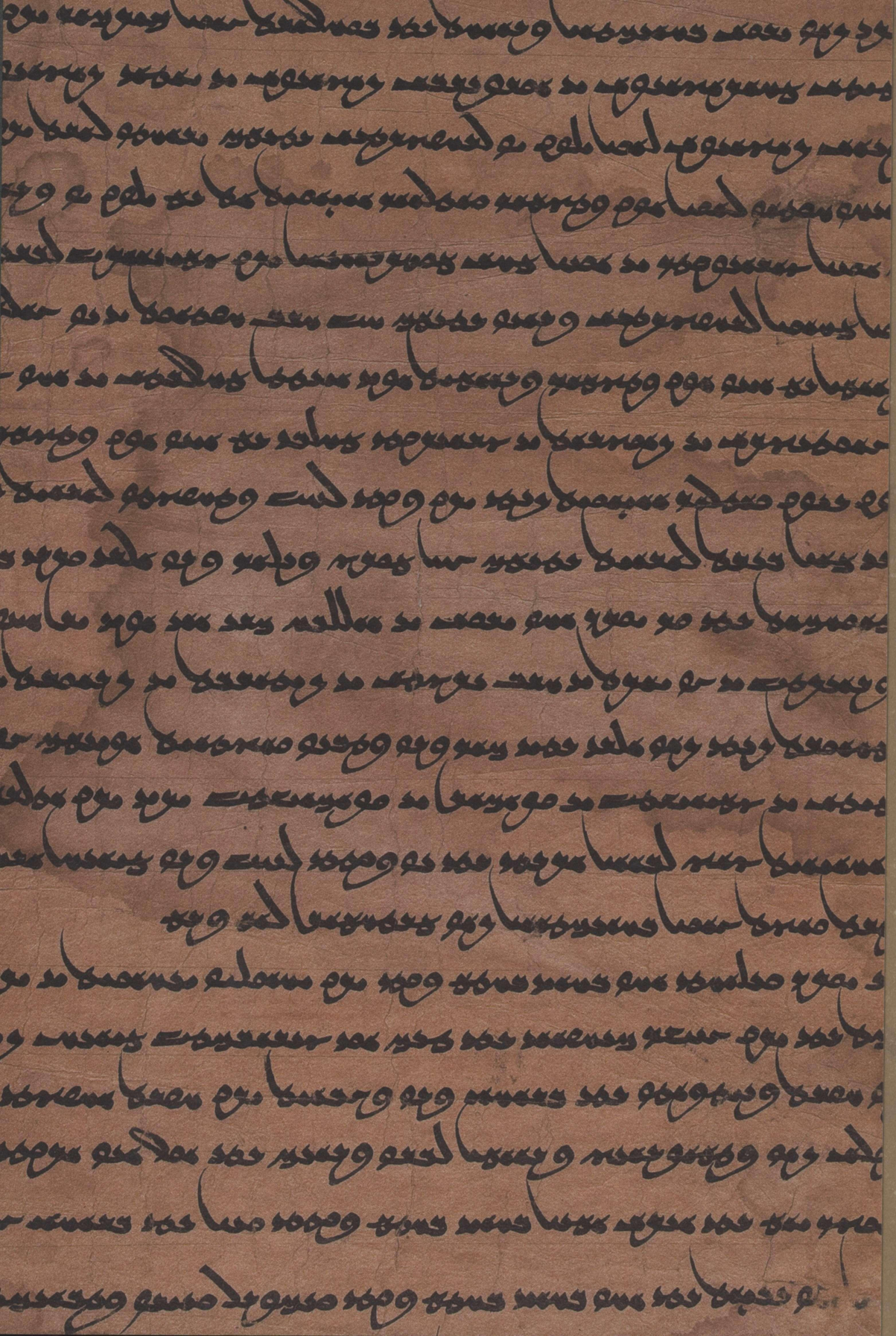


ON THE TRAIL OF TEXTS ALONG THE SILK ROAD

Russian Expeditions Discoveries of Manuscripts in Central Asia

特別展覧会

シルクロード文字を辿って

ロシア探検隊収集の文物

ごあいさつ

この度、京都国立博物館とロシア科学アカデミー東洋写本研究所は、共同で特別展覧会を開催することになりました。

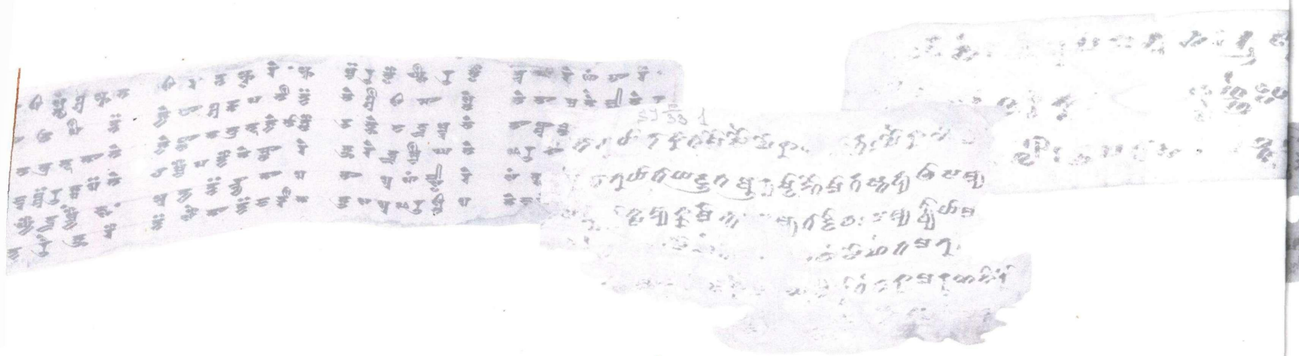
今からほぼ100年前、イギリス・フランス・ドイツ・ロシアなどの探検隊、そして日本からは大谷探検隊が、敦煌を中心とした中央アジアに向かい、大量の仏典の写本を中心に数々の文物を発見・入手しました。中でも敦煌遺書類の発見は、人文科学の分野における20世紀最大の発見といわれ、それらの文献類を中心に研究する敦煌学という学問分野が形成されました。その中心的役割を担ったのが日本・京都であることは、周知の通りでありましょう。

敦煌を中心とした西域出土の文献類は、全世界に5万点余もあるといわれていますが、中国・イギリス・フランス・ロシアに所蔵されるものが世界四大コレクションと称されています。その四大コレクションのうちロシアのコレクション、すなわちサンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所に所蔵される文献類は、敦煌と中央アジア周辺、さらにはカラホトのものが有名であり、写本の仏教経典を中心に漢文・西夏語・コータン語・トハラ語・ソグド語のものなど、その総数は断片を含んで2万点以上と報告されています。

今回の特別展覧会では、それらの中からコータン・クチャ・カラシャール・トルファン・敦煌・カラホトで発見された文献を中心に、世界的にもよく知られた写本・版本類の優品約150件を展示します。時代的には、ほぼ1～2世紀前後から12世紀にわたり、文字の違いはいうに及ばず、写本のかたちや書写の形式などにもそれぞれの違いが見られ、大変興味深いものがあります。悠久のシルクロード、その大地に眠っていた文献類を目の当たりにする絶好の機会になります。

最後にこの特別展覧会を開催するにあたり、格別のご配慮をいただいた関係各機関に心よりお礼を申し上げます。

平成21年(2009) 7月
京都国立博物館
ロシア科学アカデミー東洋写本研究所



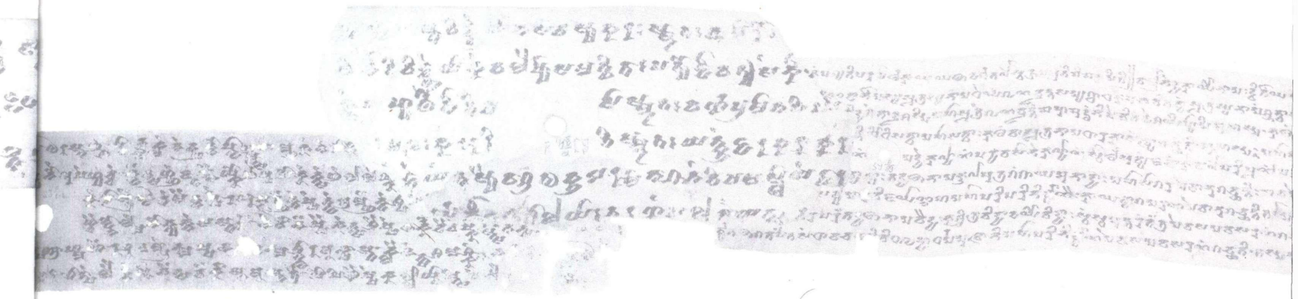
Preface

The Kyoto National Museum and the Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences in Saint Petersburg proudly present *On the Trails of Texts Along the Silk Road: The Russian Expeditions Discovery of Manuscripts in Central Asia.* The manuscripts excavated from the Western Regions of China, primarily Dunhuang, are said to number fifty thousand and belong to four major collections in the world—respectively in China, the United Kingdom, France, and Russia. About one hundred years ago, exploration parties from England, France, Germany, and Russia and the Otani expedition from Japan headed to Central Asia in search of these rare artifacts. The Russian collection belonging to the Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences has over twenty thousand works, including fragmentary segments, written in classical Chinese, Tangut, Khotanese, Tokhari, and Sogdian, and is well known for its Buddhist scriptures and rare texts from Dunhuang, Central Asia, and Khara Khoto.

Featuring approximately 150 exemplary hand-copied and printed manuscripts belonging to the Institute, this special exhibition highlights documents discovered in Khotan, Kucha, Karashar, Turfan, Dunhuang, and Khara-Khoto and dated to around the first to second century A.D. to the twelfth century A.D. This rare opportunity to view these historic works from the eternal Silk Road in Kyoto, which has played a major role in Dunhuangology—the field created to research one of the greatest twenty-century discoveries in the Humanities—also reflects upon the fascinating differences in lettering, format, and writing style of the various manuscripts.

In closing, we express our gratitude to all those who made this exhibition possible.

July, 2009
Kyoto National Museum
The Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences



凡　例

- この目録は、京都国立博物館を会場に平成21年7月14日(火)より9月6日(日)までを会期とし、同館とロシア科学アカデミー東洋写本研究所が共同で開催する特別展覧会「シルクロード　文字を辿って」の解説付総目録である。
- 図版番号は展示作品番号に一致するが、展示順序とは必ずしも一致しない。
- 作品の所蔵は、エルミタージュ美術館の1点(図版98)を除いて、すべてロシア科学アカデミー東洋写本研究所である。
- 展覧会の企画は、京都国立博物館とロシア科学アカデミー東洋写本研究所が共同して行い、目録の編集は、高田時雄京都大学人文科学研究所教授（京都国立博物館・調査員）と京都国立博物館の赤尾栄慶が担当した。
- 目録の総説は、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所のイリナ・ポポヴァ所長と高田時雄教授が執筆し、各章の解説は赤尾栄慶が執筆した。
- 作品解説は、京都国立博物館の赤尾栄慶（A.E.）と大原嘉豊（O.Y.）、京都大学の高田時雄教授（T.T.）、同教授が京都大学人文科学研究所で主宰する俄蔵文献研究会のメンバーである高啓安（G.Q.）、辻正博（T.M.）、松浦典弘（M.N.）、余欣（Y.X.）、藤井律之(F.N.)、永田知之(N.T.)、岩尾一史(I.K.)の諸氏が分担執筆した。解説の末尾に執筆者のイニシャルを付した。
- ごあいさつ、凡例、章解説、注記の英訳は、原マヤが担当した。
- 作品の画像は、エルミタージュ美術館の1点(図版98)を除いて、すべてロシア科学アカデミー東洋写本研究所の提供である。

会　　期：2009年7月14日(火)――9月6日(日)
主　　催：京都国立博物館・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所
後　　援：ロシア連邦大使館・外務省・文化庁
広報協力：毎日新聞社
協　　力：フィンランド航空

ON THE TRAIL OF TEXTS ALONG THE SILK ROAD

Russian Expeditions Discoveries of Manuscripts in Central Asia

特別展覧会 **シルクロード―文字を辿(たど)って**
ロシア探検隊収集の文物

目 次

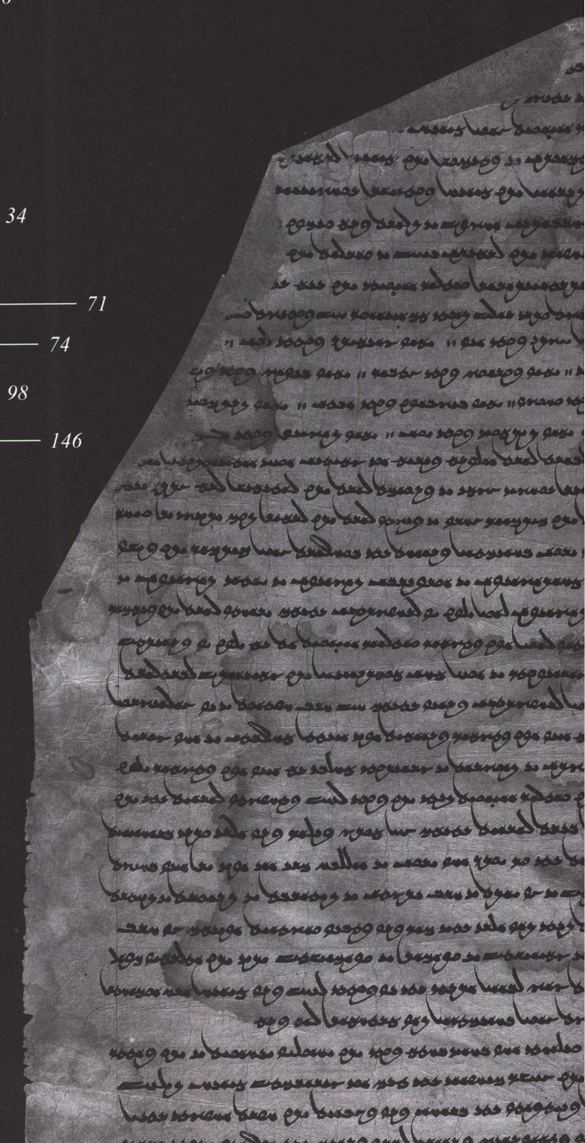
ごあいさつ ―――― 2
英文ごあいさつ ―――― 3

総　説
19世紀末から20世紀初頭における
ロシアの中央アジア探検隊 ―――― 6
I.F. ポポヴァ

ロシアの中央アジア探検隊所獲品と
日本学者 ―――― 25
高田時雄

図　版
第1章 コータン XOTAH ―――― 34
第2章 クチャ КУЧА ―――― 52
カラシャール КАРАШАР ―――― 71
トルファン ТУРФАН ―――― 74
第3章 敦 煌 ДУНЬХУАН ―――― 98
第4章 カラホト ХАРА-ХОТО ―――― 146

出品目録 ―――― 181
英文各章解説 ―――― 191
英文出品目録 ―――― 196



19世紀末から20世紀初頭における ロシアの中央アジア探険隊

I. F. ポポヴァ *I. F. Popova*

広大な中央アジアは、19世紀前半以来、ロシアにおいて総合的研究の対象となってきた。中央アジアには、遊牧する民、定住する民など、実に様々な民族が暮らしている。そこでは異なった言語が話され、文化的には仏教、ムスリム、そして東方キリスト教の特徴が結び合わさっている。遠い昔、中央アジアを訪れた商人や旅行家たちがすでに証言しているように、ロシアと極東とのコンタクトゾーンは、経済的にも文化的にも、極めて重要であった。そのため、あらゆる方面から、その地帯の調査がなされてきた。

中央アジアの大地には、果てしない沙漠、半沙漠、そして高原や高地がある。境界は、自然が定める。東には、大興安嶺の南に連なる山々と太行山脈があり、南には、インダス川とブラフマプトラ川の上流域がある。西と北には、東部カザフスタンの連峰、アルタイ山脈、そしてサヤン山脈がある。ソビエト連邦崩壊後、中央アジアの概念領域は拡大し、中部アジアも含むようになった。すなわち、トルクメニスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、キルギスタン、カザフスタンのような国々も中央アジアとみなされるようになった。

ヨーロッパの歴史伝統では、その全領域、あるいはその一部に言及する際、様々な呼称を用いてきた。漢文資料で「西域」として記述される中央アジアの領域は、18 世紀と 19 世紀前半のロシアとヨーロッパの歴史記述では、ブハラ・ハーン国が位置する大ブハラとの対比から、小ブハラとして言及された。ヨーロッパでは、これらの土地は、18・19 世紀に、トルキスタン、すなわち「テュルク人の土地」と呼ばれるようになった。それは、遊牧のテュルク族が駆け巡ったフェルガーナ及びブハラの東側の領土に対する、本来のイラン語の名称である。後にテュルク族がカスピ海からロプノールに及ぶ巨大な領土を占有した時、トルキスタンという名称は、その指示する対象を拡大した。それがあまりにも広域であったため、ブハラ・トルキスタンあるいは西トルキスタン（ロシア・トルキスタン）、そして東トルキスタン（シナ・トルキスタン）といった地域を区別する必要が生じた[※1]。タリム盆地は、カシュガリアと呼ばれた。イリ、カラタル、ビエン、アクス、レプサ、バスカンそしてサルカンド川流域の、北はバルハシ湖と南は天山山脈に挟まれた広大な一帯は、セミレチエ（「七つの川の地」を意味するロシア語）と名付けられた。東トルキスタンは、モゴーリスタン・ハーン国が 14 世紀から 16 世紀までそこに存在したので、モゴーリスタン（あるいはモグーリスタン）と呼ばれた。北のモンゴル・アルタイ山脈と南の天山山脈との間の歴史地帯であるジュンガリアは、その名をジュンガルあるいはオイラートという地方部族名から得た。

今日では地理学上の名称である「東トルキスタン」と「西域」は、中華人民共和国の新疆ウイグル自治区、もしくは 1884 年に設けられた清朝（1644-1911）統治下の中国新疆省が占有する地と同じところを指す名称とみなされている。新疆という地名は、清朝がその勢力を中央アジア東部の地にまで及ぼした 18 世紀後半には、この地域に言及する呼称として通用した。しかしこの地名は元来、例外なく、中国の新しい領土すべてを指した。新疆という地名が中華帝国が新たに併合した北西諸地に限定されるのは、嘉慶帝（1796-1820）の治世になってからのことである。

ヨーロッパと極東の交易関係は、前 1 世紀には確立されている。というのは、その当時のローマ帝国の諸文献が、中国で生産されたことが確実な絹織物に言及し始めるからだ。とはいえ、初期の接触は、間接的である。紀元後最初の 1000 年紀は、中国商品（主に絹）が、アラブ人、ホレズム人、ソグド人の仲買人によって、シルクロードとして知られているところを通って運搬された。西洋は、7 世紀から 9 世紀のアラブ人の征服と関連して、中央・東アジアの知識を増やした。アル＝イスタフリ（al-Istakhri）、イブン・ハウカル（Ibn Khaukal）、アル＝ムカッダスィー（al-Muqaddasi）、イブン・アル＝ファキーフ（Ibn al-Faqih）、イブン・ホルダードビフ（Ibn Khordadbeh）、クダマ（Qudama）、イブン・ルスタ（Ibn Rustah）、アル＝ヤクービ（al-Yaqubi）、アル＝マスーディ（al-Masudi）、アル＝ビルーニ（al-Biruni）、ガルディーズィー（Gardizi）、ヤークート（Yaqut）、そしてその他の著者によるアラビア語とペルシャ語の歴史学的・地理学的著作は、中央アジア諸民族の歴史と地理についての情報を含んでいる。しかし中央アジアについてのより豊富な情報は、ヨーロッパ人からもたらされた。彼らは、十字軍を派遣し、12・13 世紀にはモンゴルの諸ハーン国へ使節（たとえば、プラノ・カルピニやウィリアム・ルブルック）を派遣した。

12 世紀のイタリア沿岸諸国の勃興は、ヨーロッパ人の東洋への旅行をさらに促した。外交官、商人、冒険家、遊行僧たちが、おのおの現実的な目的や使命をもってアジアへと群がった。東洋に関する情報集積などの調査に必要不可欠な環境の整備は、15 世紀まで続けられた。その時期の特徴は、東洋の諸言語で書かれた原典資料に基づいた著作を欠いていたことである。すなわち情報の多くは、古代シリア・ビザンツ帝国・古代アルメニアといった、東洋と西洋の中間にあった諸国の文献に由来するものであった。しかし、やがてヨーロッパ人は、直接見聞きして集めた知識を、旅行記、旅程、雑誌、放浪記、年代記、十字軍計画書、宣教師や巡礼者による作品、書簡、口承文学などの幅広い著作やジャンルの中にまとめ始めた[※2]。13 世紀後半、17 年間中国で過ごしアジア各地を訪れたマルコ・ポーロは、 その体験を『東方見聞録』に叙述している[※3]。

ロシア人がはじめて中国と交渉をもったのは、中央アジアを通してであった。ロシア人がカラコルムにいたことを示す最も初期の資料は、13 世紀に遡る。同じ頃ロシア人捕虜たちは、モンゴル経由で中国へ送られ、元王朝（1271–1368）の宮廷でロシア人守備連隊の任に就かされている。16 世紀には、ロシアは、ペトロフ（Иван Байков）とヤミシェフ（Бурнаш Ямышев）からカシュガルに関する情報を受け取った。彼らは、1567 年にイワン雷帝によって中国に派遣されたコサックの首領である。17 世紀前期には、チュメネツ（Василии Тюменец, 1615）、ペトリン（Иван Петлин, 1618）、そしてバイコフ（Федор Байков）に統率された外交使節団が、西モンゴルを経由して中国へ進行した。1713 年には、トボリスクの商人トルシュニコフ（Ф.Трушников）がココノールと黄河の上流域に達した。18 世紀には、イェフレモフ（Филипп Сергеевич Ефремов, 1750-1811?）が、カシュガルを訪れ、カシュガルとヤルカンドの小都市の人口と商業に関する情報とともに、東トルキスタンと中央アジアについての回想を記録した[※4]。

1. Мурзаев Э.М. Средняя Азия. Физико-географический очерк. М., 1957. С.255.［中部アジア：自然地理学概要］

2. Горелов Н.С. Восток в европейской средневековой традиции: формирование представлений и стереотипов. Автореферат диссертации на соискание ученой степени доктора исторических наук. СПб, 2006. С.10-13.［中世ヨーロッパの伝統に映じたオリエント：見方とステレオタイプの創出］

3. Книга Марко Поло. Перевод старофранцузского текста И.П. Минаева. Вступительная статья И.П. Магидовича. М., 1956.［マルコ・ポーロの旅行記、ミナーエフによる古フランス語からの翻訳］

4. Российского унтер-офицера Ефремова, ныне коллежского ассесора, десятилетнее странствование и приключение в Бухарии, Хиве, Персии и Индии и возвращение от туда чрез Англию в Россию, писанное им самим. СПб, 1786.［ロシア軍下士官にして現任八等文官エフレモフのブハラ、ヒヴァ、ペルシャ、インドにおける十年の遍歴と冒険及びそこから英国を経て帰国する物語］

ビチューリン
Никита Яковлевич Бичурин

ロシアにおける中央アジアの科学研究は、傑出した中国学者ビチューリン（Никита Яковлевич Бичурин, 1777-1853）すなわちヤキンフ神父によって創始された。彼は中国滞在中に膨大な資料を集積した後、ロシアの人々を中国それ自体へと導く前に、まずは中国と国境を接する諸地域について彼らに認識させるべきである、と確信するにいたった。彼はこう述べている。

チベット、トルキスタンそしてモンゴルを、まず最初に研究対象とするのが筋であろう。というのも、それら諸国は長い間中国と接触を保ち、中国に、インド、中部アジアそしてロシアへのアクセスを提供してきたからである。それら諸国の地理的位置と政治機構を概観することから始め、その後で中国のそれらに対する政治見解を叙述するのが適切であるように思われた。それゆえ私は、私の中国についての記述の序章として、その裁判と政治、政府と立法、民間習俗と伝統に関するいくつかの概念について述べることにした。そうすれば、中国本土を取り扱う際、中華帝国に対する十全なパースペクティブを、そのすべての政治的ねじれとともに与えることがより容易となるだろう[※5]

ビチューリンの歴史地理に関する諸作品は、出版されていないアーカイヴスに保管されているものも含め、彼の著作中、最もすぐれたものであることに疑いはない。地理データの 100 パーセント正確な翻訳と位置特定のおかげで、それらは今日なお有効である。古代・中世アジアの考古学、歴史学、そして民族学の価値ある資料として役立っている。1828 年に、ビチューリンは、『衛藏圖識』という 18 世紀の漢文資料の、注釈付き翻訳を基礎とした『チベット現状報告』を上梓した。ロシア語で出版されたチベットに関する最初の書物である、彼のこの作品は、ロシア内外で絶賛された。数々の定期刊行物が、その偉大な学術的業績を称える書評を掲載した。1829 年には、そのフランス語訳がクラプロート（H. J. Klaproth, 1783-1835）によって、注釈付きで出版された。

1828 年には、ビチューリンは、漢文資料に基づいた網羅的なモンゴルの叙述である『モンゴル記』を出版した。この本もまた、ほどなくフランス語に翻訳された。1828 年 12 月 17（29）日にビチューリンが帝国科学アカデミー通信会員に選出されたのは、主として、チベットとモンゴルを扱った彼の出版物によってである。彼のその後の書物『ジュンガリアと東トルキスタンの古代と現代』は、1829 年に刊行され、ヤキンフ神父の第 3 の主要業績となった。それは『前漢書』第 96 巻「西域伝」及び 1777 年に出版された『西域聞見録』や『大清一統志』という 18 世紀中国公認の地理書など、重要な漢文資料からの抜粋の翻訳を含んでいる。不運なことに、彼の東トルキスタンに関する書物は、ビチューリンの先の 2 冊の作品ほどには注目されなかった。『ジュンガリアと東トルキスタンの古代と現状』の真の価値が認識されたのは、かなり後になってからである。それまでは、同時代のものとしては、ポレヴォイ（Н.А.Полевой）による書評が存在しただけであった[※6]。

1848 年に、科学アカデミーは、ビチューリンに中部アジア民族史の編纂を委託した。結果、彼は『古代中部アジアの諸民族に関する資料集成』と題された、3 巻本の完璧な研究にまとめあげ、その第 1 巻は 1851 年に出版された[※7]。その研究は、それ以前には西洋社会には知られていなかった、漢文資料の翻訳に基づいている。それは「西域伝」の改訂訳、司馬遷『史記』の中国辺境諸国に関する抄録、そして後漢（25-220）・晋（265-420）・北魏（386-534）・南北朝・隋（581-617）・唐（618-907）の正史（『後漢書』『晋書』『魏書』『北史』『南史』『隋書』『唐書』）からの史料を含んでいる。

5. [Бичурин Н.Я.] Иакинф. Статистическое описание Китайской империи. С приложением географической карты на пяти страницах. В двух частях. Ч.I. СПб, 1842, С.III-IV. [中華帝国の統計学的概要]
6. Полевой Н.А. Современная библиография // Московский телеграф. 1829. Ч. 25. Прибавление к No.3. С.532-543. [現代書籍解題]
7. [Бичурин Н.Я.] Иакинф. Собрание сведений о народах, обитавших в Средней Азии в древние времена. Т.I--III. СПб, 1851. [古代中央アジアに居住した諸民族に関する資料集成]

ビチューリンは、中国の歴史的著作を用いた結果、アジア諸国と諸民族について相当量の情報を集めることに成功し、それらを研究者たちが自由に利用できるようにした。以前にはそれらにアクセスすることは全く不可能であった。ビチューリンは、歴史家であり政治家でもある、オレーニン（Алексей Николаевич Оленин, 1763-1845）にこう述べている。「……長い中国の歴史のうちに散在する、古代アジア情勢に関する諸事実は、複雑に入り組んでいます。2 つの領土の分割線がそのどちらにも属する国境地帯のようなものです。実際、ある国の境界をたどることは、その隣国の位置を明らかにすることにつながります。ちょうど、ある国について何かを語るとその国が交渉をもっている相手国の情報を提供してしまうように」[※8]。

ビチューリンの諸作品は、ロシアが強力なユーラシア国家として国際舞台に躍り出たとき、日の目を見た。極東と太平洋に確固たる足場を築いたとき、ロシアは内陸アジアの地政学上の真の重大さとその包括的調査の必要性に気づいたのである。1845年8月6（18）日、ロシア帝国地理学協会（IRGS）が勅命によって創設された。その「第一の仕事」は、ロシアに関する信頼に足る情報を集め、普及させることであり、「第 2 の重要な仕事は、諸外国、とりわけトルコ、ペルシャ、中国などのロシアと国境を接する国々を研究することであった」[※9]。さらに、1846 年には、スラブ・ロシア、古代ビザンツ帝国、そして西及び東ヨーロッパの考古学部門からなる、ロシア考古学協会が設立された。

幅広い層の読者が、アジアという未知の世界に、強い関心を寄せた。多くの者が、アジアを探険し、その地理を図示する必要性を感じた。1848 年に、宮廷顧問ゴルブコフ（П.В.Голубков）は、地理学協会に 2350 ルーブルを寄付した。カール・リッターの代表作である『地理学』（*Die Erdkunde*）を、アジアの地図と補遺を付加して出版する費用としてである。19 世紀前半の中央アジアの地勢図制作は、カール・リッターとアレクサンダー・フォン・フンボルトによる調査に基づいていたことは事実であるが、彼らの理論的証拠はフィールドワークによっておらず、山脈や高原の誇張された広がりやいくつかの山系の不正確な位置測量など、数多くの欠陥を含んでいた。にもかかわらず、セミョーノフ（П.П.Семенов）によって編集及び補足された、カール・リッターの作品のロシア語訳 5 巻が 1856 年から 1879 年の間に準備され出版された。その準備と出版は、ロシアにおける歴史地理学の発展と中央アジアの地図制作に刺激を与えることになった。

アジアの網羅的な地図を作ろうとする最初の試みは、1850 年になされた。すなわち同年後半に、ハヌィコフ（Я.В.Ханыков）とボロトフ（А.Р.Болотов）が、中央アジアの北西部の地図を出版したのである。1851 年には、ハヌィコフが、イシック・クル地域の地図を完成した。そして 1856・57 年には、傑出した地理学者のセミョーノフ（ティエンシャンスキー）（Петр Петрович Семенов-Тян-Шанский, 1827-1914）が、天山山脈の頂上を征服した、初めてのヨーロッパ人となった。彼の実地踏査は、内陸アジアの地理構造の概念を一変させた。セミョーノフは、1873 年から 1914 年の間ずっと地理学協会を主導し、多くの困難かつ生産的な探険に着手した。それらの探険の第 1 の成果によって、地理学的目的のみならず、民族学的・歴史学的目的をも遂行すべきであることが明らかとなった。

歴史地理学における諸問題は、多くの同時代の学者にとって、現下の関心事であった。多くの大学が、地理発見史や歴史地名学に関するコースを提供した。中国と中央アジアの歴史地理学の研究に対する実質的な貢献は、中国学者ワシーリエフ（Василий П. Васильев, 1818-1900）によってな

8. 以下から引用。Тихонов Д.И. Русский китаевед первой половины XIX века Иакинф Бичурин // Ученые записки Ленинградского государственного университета. No. 179. Серия востоковедческих наук. Выпуск 4. Л., 1954. С.282-3. [19 世紀前半期のロシア人中国学者ヤキンフ神父ビチューリン]
9. Матвеева М.Ф. Исследование Центральной Азии—одна из самых ярких страниц в истории Русского географического общества // Санкт-Петербург—Китай: три века контактов. СПб, 2006. С.128. [中央アジアを調査する：ロシア地理学協会史上もっとも印象的なページ]

された。彼の著作の4分の1は、地理を扱っている[※10]。ワシーリエフは、古代にあっては中央アジアの諸河川は、シル・ダリアの支流であり、それと一体であった、と考えた最初の人物である[※11]。遺憾ながら、彼の論文の多くは、未出版のままであった。たとえば、「10世紀から12世紀の中央アジア東部の歴史の概要」(23頁, 1857)「東トルキスタン地誌」(25頁)「クルジャ(旅行ノート)」(2頁)などがそうである[※12]。

1845年に、ワシーリエフは、玄奘『大唐西域記』の翻訳を終えたが、不幸なことに、それは日の目を見ることはなかった。テクストは、ロシア科学アカデミー文書館のサンクト・ペテルブルク支部にある、ワシーリエフ・ファイルに保管されている。それは、注釈と地図のついた合計334フォリオからなる、12冊のノートブックとして残されている[※13]。ロシア語で書かれた著作を含めて、その後の中央アジアについての研究は、フランス人中国学者スタニスラス・ジュリアン（Stanislas Julien, 1799–1873）が1851年に出版した、玄奘の同作品のフランス語訳に依拠してきた。

高名なインド学者であるミナーエフ（Иван Павлович Минаев, 1840-1890）は、ロシアとインドの間に横たわる諸国の地理に関する1冊の書物を上梓した[※14]。彼はまた、1880年代には、マルコ・ポーロの『東方見聞録』を学術的にロシア語へ翻訳している。この翻訳は、バルトリド(В.В.Бартольд)によって改訂され、ミナーエフの死後に出版された[※15]。

中部アジアと中国への多くの探険に参加したカザフ族の学者であり教育者である、ワリハノフ（Чокан Чингисович Валиханов, 1835-1865）の調査は、ロシア東洋学に多大な貢献をなした。1856年に、彼は中国西部とクルジャへ旅行した。1858年10月から1859年3月まで、彼はムスリム商人に変装して天山山脈を越え、カシュガルに滞在した。彼はそこで、歴史資料及び古銭学のおびただしい資料を集積する一方、古代仏教遺跡について記録した。彼は、この旅行の成果に基づいて、2篇の大きな論文を書いた。すなわち「中華帝国の西域について」と「クルジャとチュグチャクにおける交易について」である。それらは、1962年まで出版されることはなかった[※16]。ワリハノフもまた、彼が探訪した諸国の歴史と宗教に興味をもった。彼は、クチャ付近一帯を描写して、こう指摘している。「ここの山脈には多くの石窟があり、夏の間はそこに灯がともる。内部に仏教の偶像が彫られた石窟もある。それらは唐王朝にまで遡る」[※17]。

19世紀後半、アレキサンダー・フォン・フンボルト、アベル・レミュザそしてスタニスラス・ジュリアンの作品とともに、ビチューリンの作品が刺激となって、中央アジアの歴史学・歴史地理学・民族学に関する、完全で包括的な多くの概説書が生まれた。V.V. グリゴリエフ（Василий Васильевич Григорьев, 1818-1881）による歴史概論である『東トルキスタン』[※18]が、カール・リッターの『地理学』の補遺として、1869年と1873年に2巻本で出版された。それは、ヨーロッパの学者たちの研究を基礎としているだけでなく、古代アラブとペルシャの資料をも援用している。一方、ブレットシュナイダー（Эмилий Василиьвич Бретшнейдер, 1833-1901）は、1876年と1888年に歴史地理学に関する書物を出版した[※19]。

---

10. Горбачева З.И. Петров Н.А., Смыкалов Г.Ф., Панкратов Б.И. Русский китаевед академик Василий Павлович Васильев (1818-1900) // Очерки по истории русского востоковедения. М., 1956. С.296.［ロシア人中国学者・アカデミー会員　V.P. ワシーリエフ］
11. Васильев В.П. Центральная Азия и главные хребты гор в китайских владениях // Журнал министерства народного просвещения. Ч. 73. 1852. отд. II. С.127.［中央アジアと中国領土の主要山脈］
12. РВА RAS（ロシア科学アカデミー文書館サンクト・ペテルブルク支部）Ф. 775. Оп. 1, ед.хр. 91, 147, 150.
13. РВА RAS. Ф. 775. Оп. 1, ед.хр. 8.
14. Минаев И.П. Сведения о странах по верховьям Аму-Дарьи (по 1878 год) // Известия Императорского Русского Географического общества. СПб, 1879.［アム・ダリア上流域の諸地方に関する情報］
15. Минаев И.П. Путешествие Марко Поло. Перевод старофранцузского текста. СПб, 1902.［マルコ・ポーロの旅行記、古フランス語からの翻訳］
16. Валиханов Ч.Ч. Собрание сочинений . Т. 2. Алма-Ата, 1962. С.105-144, 145-164.［ワリハノフ著作集第二巻］
17. Валиханов Ч.Ч. О Западном крае Китайской империи // Собрание сочинений . Т. 2. Алма-Ата. 1962. С.112.［中華帝国の西域について、著作集第二巻］
18. Риттер [К]. Землеведение. Восточный или Китайский Туркестан. Перевел с присовокуплением критических примечаний и дополнил по источникам, изданным в течение последних тридцати пяти лет В.В. Григорьев. Вып. 1. СПб, 1869; Вып. 2, СПб, 1873.［リッター地理学：東あるいはシナ・トルキスタン。V.V. グリゴリエフによる翻訳と批判的註釈］
19. Bretschneider, E. *Notices of the Medieval Geography and History of Central and Western Asia*. St.Petersburg, 1876; Bretschneider, E. *Medieval Researches from Eastern Asiatic Sources. Fragments towards the Knowledge of the Geography and History of Central and Western Asia from 13th to the 17th Century*. Vols. 1-2. St.Petersburg, 1888.

中央アジアは、ロシアの軍事的・政治的利害の第1の対象であった。19世紀中頃から、ユーラシアの巨大空間は、新市場と原材料資源の支配権獲得をめぐって、ロシア帝国と大英帝国が競い合う場となった。さらに中国及びアフガニスタンもまた、当時両者の境界がはっきりとしていなかったため、この「グレイトゲーム」に参入した。これらの列強は、勢力範囲を分けることによって、便宜的な地理的境界、ゾーンもしくは州を画定する問題を、地政学レベルで解決しようとしていた。地理的要因が、最重要であった。なぜなら、見込まれる境界が、自然の特有の輪郭によって便宜的に固定されることが明白だったからである。

それゆえ、ロシア政府と参謀本部は、モンゴル、中国そして中東地域で踏査を実施するために、19世紀以降定期的に探険隊を送り出した。それはアジア地域に対するロシアの政策としてなされただけではなく、逆に踏査の結果が政策を決定することもあった。クロパトキン（Алексей Николаевич Куропаткин, 1848-1925）を隊長とした1877年の派遣[※20]は、同じプログラムの一部である。中国と、他方は新たにロシア帝国に加わったフェルガーナ及びセミレチェンスク地方との国境が確立されつつあった1883年には、中国とロシア政府の代表者が3年後に再び国境を調査し、国境線を更新するということが取り決められた。この調査のための第1次旅行が、1885年にグラブチェウスキ中尉（Bronisław Ludwigovich Grąbczewski, 1855-1905）に委任され、彼は詳細な報告をまとめあげた[※21]。彼の直接の任務は、カシュガリアにおける軍隊と軍事要塞の情報を提供することであったが、彼はまた詳細な道路探索記録とその地方の2、3の地図をも提出した。多くの旅行者はその後長い間、以上の諸探険によって提供された地図と旅程とを頼りにしたが、彼らはそれが非常に正確なことを知ることとなった。

ロシアは、1867年に西トルキスタンを併合したとき、英領インドの国境地方に接近した。1869年に、大英帝国は、中央アジアにおけるロシアの勢力拡大を阻止しようとして、影響範囲を分割し両国の勢力領域間に緩衝地帯を設けるという案を思いつき、ロシアと交渉を始めたいという意向を明らかにした。1872–73年の英露協定（相互理解条約）は、二帝国の影響範囲の境界線としてアフガニスタンの国境を明確にした。しかしながら、1876年にロシアはコーカンドを併合し、東パミールに足場を作り始めた。その間、アフガニスタン国王アブドゥッラフマーン・ハーン（Afghan emir Abdurrehman-khan）は、1883年にバダフシャンに隣接する多くの領土を引き継いだ。それは、大英帝国の利権に見合った領有であった。それ以降、両帝国は、彼らの前哨基地を前進させることによって、将来の交渉基盤をより確実にしようと、競合する領土を踏査することに尽力した[※22]。

ロシア帝国の参謀本部は、その地域の地形学的・地図製作学的調査を組織的に実施するにあたり、その目的を軍事情報に限定することはなかった。彼らは委任された学者たちに、古い寺院と要塞の廃墟の地図も作成するよう命じたのである。参謀総長であった、オブルチェフ（Николай Николаевич Обручев, 1830-1904）は、参謀本部科学軍事委員会を創設した。それによって『アジアに関する地理学的・地形学的・統計学的資料集成』が出版されることとなり、第1次世界大戦勃発以前に87冊が公刊された。

1867–69年に、プルジェワリスキー（Николай Михайлович Пржевальский, 1839-1888）は、ウスーリスク地方へ第1回めの旅行を果たした。この傑出した旅行家は、1870年から1880年までに4度の中央アジア探険を敢行したが、それは合計3万キロにも及んだ。彼は1870–73年にはモンゴル、中国、

---

20. [Куропаткин А.Н.] Очерки Кашгарии генерального штаба подполковника А. Куропаткина. СПб, 1878.［参謀本部・陸軍中尉クロパトキン著『カシュガル論集』］
21. Отчет о поездке в Кашгар и южную Кашгарию в 1885 году старшего чиновника особых поручений при военном губернаторе Ферганской области поручика Б.Л. Гронбчевского (Громбчевского). (Печатается на правах рукописи. Секретно.) [Фергана, б.г.］［フェルガーナ地域軍事政府長官下の特別上級コミッショナー・グラブチェウスキ中尉の1885年カシュガル及び南部カシュガリア旅行報告］
22. Лужецкая Н.Л. Материалы к истории разграничения на Памире в Архиве востоковедов СПбФ ИВ РАН (фонд А.Е. Снесарева): «Отчет Генерального штаба капитана Ванновского по рекогносцировке в Рушане» (1893) // Письменные памятники Востока. 2005. No.2 (3). С.135.［ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部東洋学者アーカイヴスのパミールの輪郭に関する諸資料（A.E. スネサレフ資料）：参謀本部のヴァノフスキー大尉のルシャン踏査に関する報告］

チベットへ、その後 1876–77 年にはジュンガリアとロプノールへと赴いた。また 1879–80 年には第 1 次チベット探険隊を、1883–85 年には第 2 次チベット探険隊を率いた。彼は何冊もの書物を著して、彼の探険の学術的アウトラインを示した。それらは、動植物の生活とともに、地方の自然、気候、そして土地の高低についての詳細で生き生きとした記述を含んでいる。プルジェワリスキー自身は、謙遜して自身の旅行を「科学的踏査」と呼んだ。実際、彼が探訪したアジアの領土は、以前には科学者によって探険されたことはなかった。ヨーロッパ人に中央アジアを紹介し、アクセスが困難な地域への関心を駆り立て、その結果、大規模で定期的な探険活動をスタートさせたのは、まさに彼の功績である。

プルジェワリスキー
Николай Михайлович Пржевальский
1839-1888

プルジェワリスキーは、前人未踏であった何千キロもの土地や多くの山脈を図示した最初の人物である。彼は自らの時代を中央アジア旅行の「叙事詩的」時代と描写した。彼の最後の書物には、その科学的意志とも言い得るものを含んでいる。彼は、中央アジアの研究は必然的に次の二方向をとるべきである、とはっきりと指摘した。それは「今なお探険されていない地域の科学的踏査と、より近づきやすい諸地方か、あるいは短期の旅行によって表面的にしか踏査されなかった諸地方の徹底的な調査である」[※23]。地理学と自然科学の観点から、チベットの研究に最優先権を与えながら、彼は東トルキスタンのいくつかの地方、特にチェルチェンにおける特化した考古学的調査の必要性を力説し、また考古学に関するコメントを多く残している。

> 生命の糧である貯水池の枯渇と猛烈な沙漠化の進行の証拠として雄弁に旅行者に語りかけるのは、かつて繁栄したオアシスや砂に埋もれてしまった小都市の跡である。我々は中国の年代記からそれらの多くを知ってはいたが、そのいくつかを我々自身で目撃した。実際、我々は土地の人たちが「往時コータンとアクスとロプノールによって仕切られた一帯には、23 の小都市と 360 の村があったが、皆消え去った」と語るのを聞いた。伝説によれば、当時、人は「家の屋根づたいに」ロプノールからクチャの小都市へ行くことができるほど、タリム盆地は人が密集していた。それが、今や砂漠である。今日でも、コータン、ケリヤ、ニヤ、そして今なお生き残っているその他のオアシスの住人たちは、秋と冬の間、嵐によって曝し出される昔の居住地の廃墟を求め、毎年、砂のなかへ踏み入る。時にはそこで、金や銀の製品を見つけることがある。また古い居住用の小屋に遭遇することもあるが、そこに残された衣服やフェルト製品は、朽ちはてて大抵は触れるやいなやほこりと化すほどだという[※24]。

1879 年に、植物学者のレーゲル（Johann Albert Regel）は、クルジャとトルファンを探訪した。この探訪を含む、1876–79 年のトルキスタン地域への彼の探険旅行は、主に自然史の調査を目的として組織されたものであった[※25]。しかしながら、彼の報告は、「トルファン、サンジャそしてマナスの近くにある、おそらくはアーリヤ人の古代廃墟の発見」について詳しく述べている[※26]。彼は、

23. Пржевальский Н.М. Четвертое путешествие в Центральную Азию. От Кяхты на истоки Желтой реки. Исследование Северной окраины Тибета и путь через Лоб-Нор по бассейну Тарима. СПб, 1888. С.64. ［第四次中央アジア旅行。キャフタから黄河源流へ。チベット北部辺境の調査及びタリム盆地・ロプノール旅行］
24. 同上 C.356.
25. Regel, A. Reisen in Central-Asien. 1876-1879. Mit. Bd. 25. St. Petersburg., 1879; Mit. Bd. 26. St.Petersburg, 1880; Regel, A.E. Meine Expedition nach Turfan, 1879. Mit. Bd. 27. St.Petersburg, 1881.
26. Регель А.Э. Путешествие в Турфан. Читано в Отделении математической и физической географии Императорского Русского Географического общества 10 марта 1881 г. Отдельный оттиск из Известий Императорского Русского Географического общества за 1881 г. Т. 17. Вып. 4. С.16. ［トゥルファン旅行：1881 年 3 月 10 日ロシア帝国地理学協会、数理・自然地理学部門における発表］

古代イディクト・シャーリ遺跡をはじめ、2、3 の考古学的記念碑の実測図を書き上げた。オルデンブルグは、レーゲルを、東トルキスタンの古代遺物に注意した最初のロシア人と呼んだ[※27]。

ミナーエフは、広大な東トルキスタンの、東西文明の古代コンタクトゾーンとしての真の重要性を認識した最初の人物であった。彼は、プルジェワリスキーのタリム盆地南側に関する探険報告に対する書評で、こう記している。

> 紀元後 5 世紀以来、生の証拠が、その地帯における異国文明の影響を明らかにしてきた。かつてそこに存在したものは何もかもが、今日の人類史の年代史家には、今なお隠されたままである。古代の目撃者の話には、極端なバイアスがかかっているように思える。いわば意図的な一方への片寄りがある。仏教の巡礼者は、一面のみを見たのであろう。
> インド文明が支配的であったことはしばしば強調される。だが、インド文化が、土着であれ輸入であれ、それ以外の地方の諸文化と並存した可能性については、暗示されることさえなかったように思えるのである[※28]。

ミナーエフは、信頼に足る東トルキスタンへの考古学的探険を始める必要性について語った時、ロプノールとコータンの間の全地帯が、的を絞った歴史的・考古学的研究の対象となると指摘した[※29]。

プルジェワリスキーの仕事は、彼の学生と追随者たちによって引き継がれた。すなわち、ペフツォフ（Михаил Васильвич Певцов, 1843-1902）、ロボロフスキー（Всеволод Иванович Роборовский, 1856-1910）、ポターニン（Григорий Николаевич Потанин, 1835-1920）、コズロフ（Петр Кузмич Козлов, 1863-1935）そしてグルム・グルジマイロ（Григорий Ефимович Грумм-Гржимайло, 1860-1936）によってである。

プルジェワリスキーの生涯に悲劇的な終止符を打った旅行、その計画に基づいたペフツォフの 1889–90 年のチベット探険は、「南トルキスタンの最初の正確な地図を制作することにはじめて成功した」[※30]。ちなみにその成功によって、その一帯の失われた文明の遺物が、人々に注目されることとなった。その探険には、ペフツォフの他、ロボロフスキーとコズロフ、さらに地質学者であり鉱山技師でもあった、ボグダノーヴィッチ（Карл Иванович Богданович, 1864-1947）も同行した。プルジェワリスキーの死後、1888 年 12 月に探険隊の隊長に任命されたペフツォフは、極めて周到に旅行準備をした。3 ヶ月を費やして、その当時入手できた東トルキスタンの歴史に関する文献をすべて勉強した。たとえば、ビチューリン、カール・リッター、ワリハノフ、ショー（R.B. Shaw）、フォーサイス（T.D. Forsyth）、ベルー（H.W. Bellew）、クロパトキン、プルジェワリスキー、グラブチェウスキ、ゼランド（N.L.Zeland）そしてペトロフスキーの著作である。さらに彼は、中国学者ブレートシュナイダーとワシーリエフに教えを乞うた。ペフツォフは、こう記している。

> 高名な中国学者ブレートシュナイダー博士から、私は惜しみない援助を受けた。彼は、私のために、1863年の中国の地図帳から、東トルキスタン、ジュンガリア、そして北西チベットの 1 ヴェルスタを 1 インチにした地図を複写し、すべての地名にロシア語訳をつけてくれた。さらに彼は私に、『西域図誌』と呼ばれる最新の中国の地理学書から東トルキスタンに関する箇所を

27. Ольденбург С.Ф. Русские археологические исследования в Восточном Туркестане // Казанский музейный вестник. 1921. No.1, 2. С.25. ［ロシアの東トルキスタン考古学的調査］
28. Минаев И.П. Забытый путь в Китай. [Рец. на:] Четвертое путешествие в Центральной Азии. От Кяхты на истоки Желтой реки, исследование северной окраины Тибета и путь через Лоб-Нор по бассейну Тарима. Н. М Пржевальского. СПб, 1888 // Журнал министерства народного просвещения. Ч. CCLXIV. 1889, No. 7. Отд. II. С.177. ［中国への忘却された道：プルジェワリスキーの『キャフタから黄河源流へ』の書評］
29. 同上 C.189.
30. Ольденбург С.Ф. Исследование памятников старинных культур Китайского Туркестана // Журнал министерства народного просвещения. Ч. CCCLIII. 1904, No.6. Отд. II. С.384. ［シナ・トルキスタンにおける古代文化の遺跡に関する研究］

提供したうえ、その国とチベットに関するヨーロッパの書籍と論文のリストを作ってくれた……北西チベットに関しては、我々の中国学者、ブレートシュナイダーとワシーリエフが調べ上げたヨーロッパ語と中国語の文献資料中には、それに言及するものを見出せなかった。アカデミー会員であるワシーリエフがチベット語の文献に基づいて編纂した手書きの地理学的概説があり[※31]、私は彼からその使用を許可された。しかしそれもまた当該国の北西部に関する情報は含まず、そこは大変高所であって極端な気候を特色とする、という一般的な説明をなすのみであった[※32]。

ペフツォフは、探険の間、その地域の遺跡に関する情報を引き出そうと、土地の人々に話しかけたようである。

私はまた、ヤルカンドでタクラマカン砂漠の廃墟について何かを見出そうと努めていた。18年間その小都市の住人であったアクサカルのナスル・ジャン・ホジャ(Nasyr-Dzhan-Hodjah)は、私にこう語った。彼の知り合いの多くの土地の人々によれば、ヤルカンドからヴェルスタ東の砂漠の果てに、コニョ・タタールと呼ばれる不規則に広がった廃墟がある。そこでは家屋の基礎部分がひときわ目につく。かつて居住地を覆ったであろう大きな木々の切り株もある。土地の人々はその廃墟で、家庭用品や様々な道具の破片、さらに金貨銀貨さえ見つけることがある[※33]。

ちなみにペフツォフは報告の中で、彼がコータン、チェルチェンそしてウルムチの近くで発見した、2、3の遺跡について述べている[※34]。

ポターニン（Г.Н.Потании, 1835-1920）は、中央アジアとりわけモンゴルの研究に寄与すること多大であった。彼は、1876–77年及び1879–80年には北西モンゴルとトゥヴァへ、1884–86年及び1892–93年には北中国、東チベットそして中央モンゴルへ、そして1899年には大興安嶺へ旅行した。彼は仕事を進める中で、自然史の研究と民族学の研究とを結び合わせた。その後の彼の出版物は、彼が探険中に集積した文化・民間伝承・大衆工芸に関する豊富な資料を概説するものとなった。

1889年に、地方遺跡に関心が強かったグルム・グルジマイロは、東トルキスタン北部を探訪した。アサシャール廃墟の詳細な記述を提供するとともに、多くの古代仏教史跡についても述べている[※35]。カターノフ（Николай Федорович Катанов, 1862-1922）は、1890年に東トルキスタンを訪れ、テュルク系諸言語に関する資料をもたらした。チベットへの探険隊が、1898–1901年にはノルズノフ（Овше Мучкинович Норзунов）によって、1899–1902年にはツィビコフ（Гомбожаб Цыбикович Цыбиков）によって率いられた。ツィビコフは、クムブムとラブランを探訪し、ラサに達し、ウイグルとキャフタ経由でロシアに戻った。彼は、オリジナルのチベット語文献を集め一大コレクションにまとめたが、それは科学アカデミーのアジア博物館に収蔵された。ツィビコフの旅行報告は、1919年に出版された[※36]。1889年に、ヤドリンツェフ（Н.М.Ядринцев）は、北モンゴルで複数のルーン文字碑銘を発見した。1889年のアスペリン（J.R. Aspelin）のフィンランド探険と、1890年のラドロフ（V.V. Radloff）のオルホン遺跡探険の目的は、それらを研究するためであった。

ロボロフスキーとコズロフによってなされた1893–95年の探険の主要目的は、トルファン南方の

31. これは1840年代に翻訳されたが、1895年まで出版されなかった。 Васильев В.П. География Тибета. Перевод из тибетского сочинения Миньчжул Хутухты. СПб, 1895. [チベットの地理学：ミンチョル・フトゥクトゥによるチベット語著作の抄訳]
32. Певцов М.В. Путешествие по Восточному Туркестану, Кун-Луню, северной окраине Тибетского нагорья и Чжунгарии в 1889 и 1890 гг. СПб, 1895. С.X-XI. [1889年と1890年の東トルキスタン、崑崙、チベット高原北端、そしてジュンガリアへの旅行]
33. 同上 C.88
34. 同上 C.106-107, 120-121, 225, 255, 336-337.
35. Грумм-Гржимайло Г.Г. Вдоль южного Тянь-Шаня. Т.1. СПб, 1896. С.273, 294-296, 323. [天山山脈南麓に沿って]
36. Цыбиков Г.Ц. Буддист-паломник у святынь Тибета. По дневникам, веденным в 1899-1902 гг. Пг., 1919. [仏教徒のチベット聖地巡礼]

リュクチュン盆地の地形学的・気象学的調査であった。その探険隊は、自然科学の一大コレクションに加えて、多くの写本と美術品をトルファンからペテルブルクへ将来した。ロボロフスキーは、その探険資料に関する出版物のはしがきで、報告が以下を含んでいないことをはっきりと述べている。すなわち「古銭、仏像、現地の古代文字サンプル、絵画、陶器、そして装飾品などについての情報である。それらは、探険隊がリュクチュン盆地全域の古代小都市で集めたり、土着諸言語で書かれた書物から写したりしたものである。一方、このセレクションには、リュクチュン低地で、すなわちイディクト・シャーリの廃墟[※36]の都市とトユク石窟で発見されたウイグル語写本の断簡を含んでいる。これらは、大いに関心を呼びおこしたので、帝国科学アカデミーは、クレメンツ（D.A. Klementz）を隊長とした特別探険隊をその地方に派遣した」[※37]。

ロボロフスキー
Всеволод Иванович Роборовский
1856-1910

コズロフ
Петр Кузьмич Козлов,
1863-1935

これら地域の学術調査に大いに貢献したロシア外交官として、以下を挙げ得る。カシュガル総領事ペトロフスキー（Николай Федрович Петровский, 1837-1908）、彼の後継者であるコロコロフ（Сергей Александрович Колоколов）、カシュガル領事ソコフ（Сергей Васильевич Соков）、ウルムチ領事のラヴロフ（Иван Петрович Лавров）とクロトコフ（Николай Николаевич Кротков, 1869-1919）、ウルムチ領事館書記官リュッチュ（Яков Яковлевич Лютш）、クルジャ領事館書記官ジャコフ（Алексей Алексеевич Дяков）、同領事ワシリエヴィッチ（Болис Васильевич）及びドルベージェフ（Владимир Васильевич Долбежев）そしてウルムチ領事館の医官カハノフスキー（Александр Иванович Кохановский）である。1867年からトルキスタンで職務についていたペトロフスキーは、写本と美術品を収集したが、彼はそれらを土地の人々から買い求めたり、考古学的な発掘をして得たのである。

オルデンブルグによれば、「ペトロフスキーの輝かしい発見は、東トルキスタンの考古学研究に新時代の到来を告げた」[※38]。そしてさらにペトロフスキーは、民族学と民間伝承の資料も集めた。1891年に、ロシア考古学協会東洋支部（OBRAS）は、カシュガルの古代遺物の件でペトロフスキーに接触した。彼は返信に2、3の写真と、のちにオルデンブルグによって研究されることになるサンスクリット語の「カシュガル写本」（『法華経』の断片）を同封した。その後、ペトロフスキーは、新しい資料を定期的にサンクト・ペテルブルクに送った。旅行者と学者は、彼の助言を求め、つねに彼から多大な恩恵を被った。ペトロフスキーは、現代のマザール（古墓）が古代の仏教遺品を覆蔵していることに気づいた。また彼は、彼が知るところとなった古代遺跡の位置をしるした、東トルキスタンの詳細な地図も作った。

中央アジア研究の成果がロシア社会の好奇心をかき立てたことは、明記されるべきであろう。19世紀後半と20世紀前半、アジア、特に仏教に関する新しいモノグラフ及び東洋諸言語で書かれた原典の翻訳の公刊を待ちきれずにいたのは、学術関係者だけではない。一般社会もそうであった。

ポターニンのオルデンブルグ宛の手紙が示すように、いわば仏教学文献に対する渇望があった。

37. Труды экспедиции Императорского Русского Географического общества по Центральной Азии. Ч.1. Отчет начальника экспедиции В.И. Роборовского. СПб, 1900. С. VI. [ロシア帝国地理学協会の探険隊による中央アジアの記録。第一部：ロボロフスキー探険隊の報告]
38. Ольденбург С.Ф. Исследование памятников старинных культур Китайского Туркестана // Журнал министерства народного просвещения. Ч. CCCLIII. 1904, No. 6. Отд. 2. С.373. [シナ・トルキスタンにおける古代文化の遺跡に関する研究]

ポターニンは、1890年12月7日付けの手紙で、オルデンブルグに、彼の所を訪問する許可を請いつつ、こう述べている。「……私は、レセヴィッチ（Вл.В.Лесевич）も招待しています。彼もまた、観音諸伝説に関心をもっているからです。私は、あなたが私に貸してくれた［諸文献で語られている］それらに心を奪われています。私が驚いているのは、それらが私がモンゴルで記録した、長寿菩薩（Ayu-Bodhisattva）伝説の中のものに似ているように思えるからです」。また1898年4月30日付けの手紙では、彼は知り合いの女性のために、「彼女が購入すべき初級サンスクリット語の手引き」について助言を求めている。さらに1900年10月20日の手紙では、色々と述べるなか、こうも語っている。

ペトロフスキー
Николай Федрович Петровский, 1837–1908

パンテレイエワ女史（Госпожа Пантелеева）は、ブッダに関する一般講義を企画しており、釈尊の生涯から絵を何枚か指定して欲しいと言ってきています。幻灯でそれらをスクリーンに投影したいようです……その講義が一般公開されたなら、同じような講義がイルクーツク地方やトランスバイカリア地域のシベリアの町でも開催できるでしょう。そうなれば、土地の人々に宗教的寛容を植え付けるのに資することとなりましょう[39]。

1896年に、ロシア地理学協会は、ロボロフスキーがトルファン・オアシスの各処を探険中に見つけたか、もしくは購入した諸文書の断片を含む袋を受け取り、サンクト・ペテルブルクへ送った。ロシア地理学協会事務局長のA.V.グリゴリエフ（Александр Васильевич Григорьев）は、専門家の諸断片に対する評価を得ようと、オルデンブルグに近づいた。オルデンブルグとイワノフスキー（А.О.Ивановский）は、袋の中身を整理し、中国語・ウイグル語・サンスクリット語・ウイグル＝サンスクリット語のバイリンガル諸写本の断片を特定した。それらの資料はラドロフへ引き渡されたが、彼はそれらを1つの論文にまとめ、科学アカデミーへ提出した。歴史・言語学科は、特別委員を任命し、考古学コレクションを調査させた。その委員会のメンバーの中には、ラドロフ、クーニク（А.А.Куник）、ワシーリエフ（В.П.Васильев）、ザーレマン（К.Г.Залеман）そしてローゼン（В.Р.Розен）の他、さらに専門家として招聘されたクレメンツとオルデンブルグが含まれていた。

委員会は1898年に、トユク古墓とイディクト・シャーリの古代遺跡を特別に調査するために、クレメンツ（Дмитрий Александрович Клеменц, 1848-1914）を、トルファン探険に派遣すべきであると提案した。彼の旅行を組織した際、委員会は、顧問をロボロフスキー探険隊のメンバーから得ようとした。クレメンツは、1889年3月4（17）日にコズロフ宛のはがきのなかでこう記している。「トルファン地帯におけるあなた方探険隊による発見のおかげでかき立てられた好奇心を考慮して、科学アカデミーは、トルファンへの探険隊を組織するための特別委員会を設置しました。そこで、アカデミー会員であるラドロフは、あなたに［アジア］博物館へ話をしに来てもらうように依頼しています。あなたがご覧になった遺跡の位置についての情報を共有させていただくことを期待しております」[40]。

探険の期間は、4ヶ月に設定された[41]。その探険には、クレメンツ自身のほか、彼の妻エリザヴェータ（Елизавета Николаевна Клеменц）と民族学者のアンドレイエフ（Михаил Степанович Андреев, 1873-1948）も同行した。クレメンツは、トルファンにおける時間的制約と財源不足のため、発掘調査を実施できなかった。しかしながら、彼は、古碑を記述し、写真におさめ、それらの実測図を書き、トレーシングと拓本をとった。その探険は、センセーショナルな科学的発見をもたらし、その成果はクレメンツの詳細な記録[42]の中に示され、彼の短い報告書によって公表された[43]。

クレメンツ（左）
Дмитрий Александрович Клеменц
1848–1914

1900年1月27日（2月9日）、ヴェセロフスキー（Николай Иванович Веселовский, 1848-1918）、クレメンツそしてオルデンブルグは、ロシア考古学協会東洋支部の援助を求めて「考古学的目的によるタリム盆地への探険隊を組織するための覚書」を提出した。彼らは、定期的な東トルキスタンへの探険隊の派遣を論点に据え、東トルキスタンで仕事を継続するためには2つの探険隊を組織すべきであると示唆した。第1次探険隊は、トルファンとクチャ地方を踏査し、第2は、ロプノール、チェルチェンそしてケリア・オアシス付近一帯を含む、トルファンとコータンの間の広大な領土を踏査し得る、と彼らは考えた[44]。

学者たちは、その「覚書」でこう指摘した。「タリム盆地の研究、そして科学的調査の対象としてのそれの発見それ自体は、疑いなくロシア探険家の功績である。フォーサイス（Forsyth）、セチェーニ伯（Count Széchenі）、ヤングハズバンド（Younghusband）そしてデュトルイユ・ド・ラン（Dutreuil de Rhins）が隊長となった外国探険隊の所獲品は他の追随を許さないほどのものであったけれども、レーゲル、プルジェワリスキーと彼の仲間たち、グルム・グルジマイロ兄弟、ペフツォフ、ボグダノーヴィッチ、オブルチェフ、ペトロフスキーそして科学アカデミーの最近の探険は、外国の学者たちによってなされたものをはるかに凌いでいる」[45]。その地域の経済的・商業的発展、特に農業の普及は、おそらく「覚書」が次のように説明した事態をともなったであろう。「歴史的遺物の無慈悲な破壊――化粧しっくいは肥料とされ、レンガ造り建築は住居建設に役立てようと壊された」。

前述したように、「覚書」は、次のような2隊の探険隊を組織することを提案した。いずれの探険隊も、必ず芸術家1人を含む、5人チームとすべきである。第1次探険は、8ヶ月から10ヶ月を要し、第2次探険は、12ヶ月から15ヶ月を要する。さらに、最初の探険には、17,000ルーブルを見積もるべきである。「覚書」は1900年1月27日にロシア考古学協会東洋部の会合で検討される運びとなった。だが、財務大臣は彼らの資金援助の依頼を拒否した[46]。そのためトルファン探険プロジェクトは、9年後まで実施されることはなかった。

1899年に、アカデミー会員のラドロフとオルデンブルグは、ローマで開催された、第12回国際東洋学者会議で発言した。その会議のテーマは、クレメンツのトルファン探険によって発見された美術品及び古ウイグル語・ルーン文字の記念碑に関するものであった。その会議の結果、1899年10月2（14）日に中央・東アジア踏査国際協会が創設されることとなった。それは、前述した諸地方の地理学的・民族学的・考古学的調査を任務とした。協会の趣意書は、ハンブルクの第13回国際東洋学者会議開催前の1902年9月8（21）日に承認された。多くの国で同様の目的のために設置された各国委員会は、ヨーロッパ人による調査のために東トルキスタンの領土を分割することに合

39. ПФА РАН. Ф.208. Оп. 3. ед. хр. 480, Л.1, 4, 5-5об.
40. 以下から引用：Петров Н.А. Научные связи между востоковедами и путешественниками-географами в конце XIX и начале XX в. // Страны и народы Востока . Вып. I. М., 1959. С.260.［19世紀後半から20世紀前半における東洋学者と旅行家地理学者との学術交流］
41. Ольденбург С.Ф. Экспедиция Д.А. Клеменца в Турфан в 1898 году // Отдельный оттиск из 45-го тома «Известий Восточно-Сибирского отдела Императорского Русского географического общества». Иркутск. 1917. С.1-2.［1898年のクレメンツのトゥルファン探険］
42. 東洋学者アーカイヴス , Ф.28. Оп.1, ед. хр. 121-37.
43. *Nachrichten über die von der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften zu S. Petersburg im Jahre 1898 ausgerüstete Expedition nach Turfan.* Hf. 1. St. Petersburg, 1899.
44. Веселовский Н.И., Клеменц Д.А., Ольденбург С.Ф. Записка о снаряжении экспедиции с археологической целью в бассейн Тарима// Записки Восточного Отделения Императорского Русского Археологического Общества. Т.XIII (1900). Вып. 1. СПб, 1901. С.XVII.［考古学的目的によるタリム盆地への探険隊を組織するための覚書］
45. 同上 C.11
46. 同上

意した。にもかかわらず、この会議の直後に組織されたグリュンヴェーデルの探険隊は、その合意を破った。

中部・東アジア踏査ロシア委員会（RCMA）が1903年に創設され、その趣意書は1903年2月2（15）日に皇帝の承認を得た。ラドロフ（Василий Васильевич Радлов, 1837-1918）が委員会の会長、オルデンブルグが副会長となった。ジュコーフスキー（В.А.Жуковский）、バルトリドそしてシュテルンベルグ（Л.Я.Штернберг）が委員会の評議員であった。外務省の管轄となった委員会は、代表者を調査対象の地域に派遣し、探険隊を組織し、ロシア語とフランス語で会報を発行する権利を獲得した。中部・東アジア踏査ロシア委員会の任務は、「物質的であれ精神的であれ、踏査対象諸国に現存する歴史的遺物の研究をあらゆる仕方で促進することであった」※47。

当局は、新しく設立された委員会に対して、当初はむしろ好意的であった。1904年1月16（29）日に、ニコライ2世は、委員会が「今年度中に、東トルキスタンにおける考古学的探険の資金として、12,000ルーブルを割り当てられる」ように命じ、外務省に（1905年以降）4年間「同じ事業に対して」年度ごとに7,000ルーブルを割り当てる権利を与えた※48。しかしながら、翌年、「前述の資金の割当は、重大な財政困難のために留保された」※49。そして1908年3月に国家予算委員会は、RCMAを科学アカデミーの管轄とすべきであると提案した。

その提案は、退けられた。RCMAが直面する難題解決には政府の実質的な支援が不可欠だったからである。ロシア委員会は現状のまま外務省の管轄として留まるべきである、というのが満場一致した決定であった。1908年3月18（31）日に、ロシア委員会の趣意書の草稿を作成するために、準備委員会がもたれた。先の決定に対する理由として以下が国会へ送られた。

1. 中央・東アジア踏査国際協会の主導機関であるロシア委員会は、必要に応じて外国政府と接触できるように定められており、その点は委員会が外務省の管理下にあることで保障される。

2. 委員会の学術調査対象となる地域の大部分は、ロシア帝国の国境を跨いでいるので、委員会は諸外国のロシア大使館並びに領事館との直接交渉を継続する必要がある。

3. 外国人がロシア領土で、またロシアの学者がアジア諸国の領土で学術活動を行うための許可を得るためには、ロシア委員会は外務省へ専門家による評価を提出する義務があり、これには外務との迅速かつ密接な交渉が不可欠である。評議委員会のメンバーは、外務省の全幅の信頼を得なければならないが、この点は彼らの任命が外務大臣によって承認されるという現行の取り決めによって保障される。

4. ロシア委員会が、国際協会の中心組織として、その学術的かつ国際的な評判を維持しようとするなら、それは他の学術団体から完全に独立していなければならない※50。

財政上の諸問題は、委員会が再三再四外務省に報告しているように、探険活動を妨げた。大臣宛の手紙にはこうある。資金削減が「委員会の東トルキスタンにおける諸々のプロジェクトに悪影響を及ぼしている。まずはその進捗を著しく鈍らせ、ついにはそれらを完全に停止させている。外国人たち、つまりドイツ人やフランス人は、早々とこの機に乗じて恩恵を被っている。彼らは、我々の残した足跡を足がかりに大規模な探険隊を送り込んでいる。委員会が活動を即刻かつ勢いよく再開しない限り、東トルキスタンにおける多年にわたるロシア人学者たちの努力は、おそらく完全に無駄となってしまうであろう」※51。

47. 同上 C.17
48. 以下の文献を参照。«Докладная записка министра финансов С.Ю. Витте Николаю Второму о невозможности финансирования археологической экспедиции в Восточный Туркестан» от 20 июня 1900 г. [ПФА РАН. Ф.148. Оп. 1, ед. хр. 4]［ニコライ2世への財務大臣S.Yu.ウィッテによる東トルキスタン考古学探険隊を支援する不可能性についての特別報告］
49. Ольденбург С.Ф. Русский комитет для изучения Средней и Восточной Азии // Журнал министерства народного просвещения. Ч. CCCXLIX. 1903, No. 9. Отд. IV. С.45.［中部・東アジア踏査ロシア委員会］
50. ПФА РАН. Ф.148. Оп.1, ед. хр. 49. Л.46.
51. 同上 Л.46.

この間RCMAは、中央アジアへの小規模な探険隊をまかなえるのみであった。1903年に、ルードネフ（Андрей Дмитриевич Руднев, 1878-1958）は、モンゴル方言を研究すべく東モンゴルへ派遣された。1905–07年には、M.M.ベレゾフスキー（Михаил Михаилович Березовский）の探険隊がクチャへ赴いた。その探険には、彼の親戚の1人も同行した。製図工のN.M.ベレゾフスキー（Николай Матвеевич Березовский）である。彼は、土木工学研究所の学生であった。

ベレゾフスキー
Михаил Михаилович Березовский
1848-1908

M.M.ベレゾフスキーは、スバシ、ドゥルドゥル・アクル、タジット、クムトラ、クチャ、キジルそしてキリシュを訪れた。彼は、壁画を水彩で模写し、多数の実測図を書き、大量の写真を撮った。後に彼の活動を、オルデンブルグはこう描写した。「才気ある写真家。優秀なマップメーカー。不充分な模写。緩慢な仕事ぶり」※52。

1905–07年に、委員会は、バラディン（Бадзар Барадийнович Барадийн）のラブランへの旅行を積極的に準備組織した。その旅行は価値ある研究材料をもたらし、「綿密かつ適切な選択により収集されたアムド刊行のチベット語木版印刷物によって、科学アカデミーのチベット語文献のコレクションを充実させた」※53。

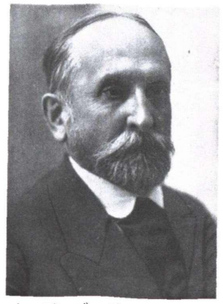
RCMAは、中央アジアへの大規模な考古学的探険隊を送り出すための資金確保に長い間苦慮したが、その地域の自然科学的地理学調査はロシア地理学協会によって継続された。1906–07年に、マンネルハイム（Carl Gustav Mannerheim, 1867–1951）は、勅命により「密かに」中国へ派遣された。彼は、特にカシュガルとトルファン地域の歴史的遺物を調査し、記録し、撮影し、さらにそのうちのいくつかの実測図を書くのに多くの時間を費やした※54。コズロフが隊長となった探険は、非常に生産的であった。彼は、1907–09年に、ゴビ砂漠にあるカラホトの死せるタングート族の都の遺物を発見し、ユニークなタングート美術の遺品と文献をサンクト・ペテルブルクへ送った。

1908年、RCMAは帝室がその活動に注意を向けてくれるように、大ツァールスコセルスキー宮殿で、ニコライ2世皇帝と選り抜きの招待客のための「東トルキスタンとサマルカンド将来の古代遺物展」を開催しようと、宮内大臣と交渉し始めた。展覧会は、M.M.ベレゾフスキーのクチャ探険隊とドゥーディン（Самуил Мартынович Дудин, 1863-1929）の西トルキスタン探険隊の所獲品を含んでいた。1日限りの展覧会が、1908年11月30日（12月13日）午前11時から午後4時まで開催された。ラドロフ、オルデンブルグ、M.M.ベレゾフスキーそしてドゥーディンもまた、招待客であった。展覧会を巡り終えた皇帝は、「ロシア委員会に特段の保護を与えることに喜んで同意した」※55。

展覧会のおかげでRCMAは、トルキスタンへの探険を組織するための政府助成金を獲得した。オルデンブルグが隊長となったが、彼のトルファン（1909-10）と敦煌（1914-15）への旅行は、ロシア・トルキスタン探険隊と称される。

オルデンブルグは、1909–10年のトルファン探険を、偵察行と考えていた。というのも、過去の諸探険による資料が一切公開されていなかったからである。実際、その点では、これまでの探険家の活動の足跡に対する失望感を引き起こされた。シチェルバツキー（Ф.И.Щербатский）は、その件に触れて、こう言わざるを得なかった。

52. 同上 Л.27-27об.
53. 同上 Л.51-51об.
54. ПФА РАН. Ф.208. Оп.1, ед. хр. 188. Л.37.
55. Востриков А.И. С.Ф. Ольденбург и изучение Тибета // Записки Института востокоьедения АН СССР. Вып. IV. М.-Л., 1935. С. 76.［S.F. オルデンブルクとチベット研究］



オルデンブルグ
Сергей Федорович Ольденбург, 1863-1934

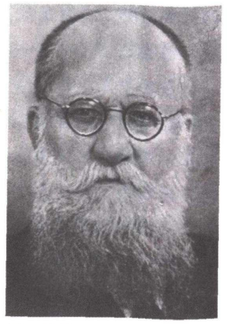
結果として、S.F.［オルデンブルグ］に率いられた探険隊が出立した時には、その地方はすでに多くの探険隊によって探訪されていた。考古学的に言うなら、その一帯はまさに略奪され終わっていた。ロシア探険隊は、海外探険隊がすでに足跡を印した地点に到着したけれども、それは既成事実を作ったにすぎず、実際には手ぶらで帰国したのである。一方その間に、ベルリンには、シナ・トルキスタン将来品のための壮大で豪華な博物館がオープンした。それは、学者や外国人ツーリストが群がる、その市のハイライトのひとつとなっている[※56]。

オルデンブルグの第1次ロシア・トルキスタン探険隊の主たる活動は、東トルキスタン北部のオアシス、すなわちカラシャール、トルファンそしてクチャに集中した。それらの地域で、およそ12の独立した寺院と石窟寺院とが調査された。オルデンブルグの考古学的研究方法は、主として、正確かつ鮮明な写真と精緻に描かれた実測図とに依拠するものである。そのため彼は、第一級の芸術写真家と地形技師をリクルートすることを重視した。芸術家でもある写真家のドゥーディンと鉱山技師のスミルノフ（Дмитрий Арсеньевич Смирнов）は、第1次探険隊のメンバーであった。第1次ロシア・トルキスタン探険は、短い報告のみがロシア語で出版された[※57]。探険のあいだにオルデンブルグによって収集された資料は、今はロシア科学アカデミー東洋写本研究所、国立エルミタージュ博物館そしてロシア民族学博物館に収蔵されている。国立エルミタージュ博物館、科学アカデミー文書館のサンクト・ペテルブルク支部、そして東洋写本研究所内にある東洋学者アーカイヴに保管されている、ロシア・トルキスタン探険の膨大な関係文書は、とりわけ注目に値する。

1909–11年と1913–14年に、マーロフ（Сергей Ефимович Малов, 1880-1957）は、各地方のテュルク民族、すなわちウイグル族、黄頭ウイグル族、ロプノールの住人、そしてサラール族の言語と日常生活を研究するために、東トルキスタンと中国中央部へ旅行した。結果として、それらの言語ははじめて学術的に記述されることとなった。『金光明経』（Altun Yaruq, Suvarṇaprabhāasa）の現存唯一のウイグル語写本の発見がマーロフの第1次探険の主要業績である。

仏教美術遺品は、ペトログラードで開催された第1回仏教展覧会で披露された。それは、内戦最中の1919年8月24日にロシア博物館のいくつかの部屋をもちいて開催された。展覧会は、インドと中央アジアから将来された品々を陳列することによって、仏教美術様式の多様性を、ロシア一般市民に紹介することを目的とした。陳列品には、インド、チベット、モンゴル、日本、ジャワそしてインドシナから将来した仏教装飾美術品とともに、敦煌壁画の模写と写真、カラホトのタングート族の都から出土した彫像と絵画が含まれた。展示は仏像を中心とし、様々な文化によるその解釈をテーマとした。仏教美術遺品は2、3点のみが、すなわち保存状態がよく、修復の必要のないもののみが出品された。壁画、写本そして民族学的コレクションは、まったく陳列されなかった。展覧会に併せて、最も著名な学者たちによる一般講演も毎週行われた。講演は、仏教の歴史とその現状に関するものであった。たとえば、オルデンブルグによる「ブッダ」、シチェルバツキーによる「ブッダの教えと聖なる共同体」、ウラジミルツォフ（Б.Я.Владимирцов）による「チベットとモンゴルにおける仏教」、そしてローゼンベルグ（О.О.Розенберг）による「日本における仏教的世界観」などである[※58]。

56. Восточный Туркестан в древности и раннем средневековье. Очерки истории. Под ред. С.Л. Тихвинского и Б.А. Литвинского. М., 1988. С.37.［古代と中世初期の東トルキスタン：史学論集］
57. ПФА РАН. Ф.148. Оп.1, ед. хр. 49. Л.103-107.
58. Щербатской Ф.И. С.Ф. Ольденбург как индианист // Записки Института востоковедения АН СССР. Вып. IV. М.-Л., 1935. С.26.［インド学者としてのオルデンブルク］



マーロフ
Сергей Ефимович Малов, 1880-1957

中央アジアの研究は、ソビエト時代に再開された。1923–26年にコズロフが隊長となった、モンゴル・チベット探険隊は、ノイン・ウラ墳墓の発掘に成功した。オブルチェフ（Владимир Афанасьевич Обручев, 1863-1956）は、シベリアと中央・中部アジアの地理学と地質学の研究に大いに貢献した。彼は、何冊もの大衆向け科学書、そして魅力的な科学フィクション小説のなかに自分自身の体験を綴った。

外国の学者も、ロシアの彼らの同業者と同時期に、中央アジアを踏査した。その地域での存在力がロシアと同じほど大きかった大英帝国は、地理学的・地図製作学的調査を実施することから始めた。自由でオープンな踏査データの交換などありえない、と考えるのがごく自然であろう。だが、これら2つの国は地政学上はライバル関係にありながら、同じ地形学的調査部隊に属する両国スタッフたちは、ヨーロッパ人にとっては未知の遠隔地である中央アジアを研究する努力をたがいに結びつけようと試みた。その試みの大半は、地理学を向上させたいという人道主義に基づいていた[※59]。ロシア地理学協会アーカイヴスは、プルジェワリスキーとコズロフの資料の中に、おびただしい英語の地図を保存しているが、それらはロシア人旅行家によって使用されたものである。また英国人も中国人もロシアの中央アジア探険隊によって作成された地図資料を欲しがった。

1865年にコータン、ケリアそしてチェルチェンを訪れたジョンソン（William Johnson）は、その地方特有の建築遺物に気づいた最初の英国人である[※60]。1870年と1873年に、フォーサイス卿（Sir Thomas Douglas Forsyth）は、公式使節として東トルキスタンに存在した短命に終わった独立国家の長ヤクブ・ベクのもとへ派遣された。王立地理学協会への彼の報告は、砂に埋もれた古代都市と彼らが隠したその宝について語っている[※61]。このフォーサイス卿の報告は、好奇心をかき立て、ロシア語でも出版された[※62]。

1889年に、バウアー大尉（Lieutenant Hamilton Bower）は、樺樹皮の上に未知のアルファベットで書かれた写本を購入し、それを東トルキスタンからベンガル・アジア協会へ送った。その写本は、最終的に著名なインド・アーリア諸語専門家ヘルンレ（A.F. Rudolf Hoernle）博士の手に渡った。博士は、写本の重要性を評価することができた。それは、サンスクリット語で書かれた仏教作品を多く含んでいた。後に、彼はこの1点のテクストの発見が東トルキスタンの考古学的研究をスタートさせた、と書き記している。この発見の結果、その地域を拠点にしていた英国外交官たちは、彼らの眼にとまった写本を購入し、それらをヘルンレに送って解読を依頼するようにという指示を受けた。

1890年に、ヤングハズバンド卿の使節団がカシュガルに到着した。彼の任務は、中央アジアに英国領事館を創設することであったが、中国当局者との最初の折衝は成功せず、その結果、彼の探険隊は1891年に帰国の途についた。ただ、若い通訳であったマカートニー（George Macartney）のみは、対中国の英国代表として留まり、1909年に公式に総領事に任命された。彼は外交官として1918年までカシュガルに滞在しながら、土地の人々から大量の写本とその他の掘り出し物を手に入れた。その後もシェリフ（D. Sheriff）、ウィリアムソン（F. Williamson）、そしてスクライン（C. Skrine）といった英国外交官たちが、写本や美術品を購入し続けた。ロシアと英国の外交官たちの場合には、科学

59. Ольденбург С.Ф. Русская Туркестанская экспедиция 1909 года. Краткий предварительный отчет. СПб, 1914.［1909年ロシア・東トルキスタン探険：簡易報告］
60. ПФА РАН. Ф.208. Оп.1, ед. хр. 233. Л.1а.
61. Постников А.В. Схватка на «Крыше мира». Политики, разведчики и географы в борьбе за Памир в XIX веке (монография в документах). М., 2001. С.343-4.［"世界の屋根"上の戦い：パミールで奮闘する、政治家と諜報員と地理学者］
62. Johnson, W.H. "Report on his Journey to Ieché, the Capital of Khotan, in Chinese Tartary." *Journal of the Royal Asiatic Society.* Vol.37 (1867).

的蒐集活動が主要な政治的任務の1つとなったことは、注目に値するだろう。ちなみに、彼らがしばしば同じディーラーから希少品を購入しようと競ったおかげで、ディーラーたちはたっぷりと稼ぐことができた。

バウアー写本の出版とスウェン・ヘディン（Sven Hedin）の報告は、傑出した探険家オーレル・スタイン卿（Sir Marc Aurel Stein）を東トルキスタン探険へと駆り立てた。1900年から1930年までに、彼はその地域へ4度探険隊を率い、敦煌とトルファンで発掘調査をし、写真入りの網羅的な考古学的・民族学的調査報告を編纂した。

1900–01年の第1次探険の11ヶ月間、彼はコータン・ニヤ・ミーラン・楼蘭の古代都市を調査した。彼は、自身の探険の詳細な報告と旅行日誌、そして数篇の論文を公表した。1906–08年の第2次探険では、スタインは、前回着手した発掘を継続し、東進して敦煌にまで達したが、そこでは漢王朝にまで遡る要塞を調査する予定であった。しかし彼は、千仏洞を発見したのである。かの名高い蔵経洞から写本を手に入れた後、シルクロードの北路を進み、トルファンにしばらく逗留した。

コータン近くで発掘調査した後、崑崙山脈で探険を終えた。彼の探険の簡潔な概要はほどなく日の目を見たが、他方、地図と図版を完備した網羅的な5巻の報告（『セリンディア』）を編集するには、7年の歳月を要した。1913–16年の第3次探険では、スタインは、敦煌の東にあるシルクロードの南方ルートに沿った古代遺跡を探訪し、トルファン周辺、すなわちアスターナとベゼクリクで発掘調査をし、カシュガルを訪れ、アフガニスタン国境に沿ってパミールを縦断し、シースターンと西イランに達した。そこでは考古学的調査も実施した。彼は、その探険について完璧な学術報告（『極奥アジア』）を出版し、数年のちには過去3つの探険を一まとめにした報告を上梓した。

1930–31年の第4次中央アジア探険の折には、スタインは前回特に心を惹かれた歴史的遺物のいくつかを再び訪れた。その後、スタインはイランとイラクへ4度の探険を敢行したが、その際には近東にあるローマの要塞の航空写真による地形探査を実施し、アレクサンダー大王の東征の跡を辿った。彼は、次にアフガニスタンへの新しい考古学的探険を始めようとしていたが、その以前に、1943年にカブールで逝去した。

1877–80年の中国へのオーストリアとハンガリーの合同探険は、ベーラ・セチェーニ（Bela Széchenі）を隊長とし、クライトナー（I. Kreitner）とローチ（L. Lóczy）も同行した。その一行は、チベットに入る意図をもって、上海から西方へ向い、甘粛省に至る長旅をした。しかしながら、中国当局者に阻止され、ビルマへ向かわなければならなかった。

ドイツでは、1899年にローマで開催された第12回東洋学者国際会議で、トルファンへ探険隊を送ることが決定された。ラドロフとオルデンブルグがペーパーを発表した直後のことである。しかしながら、資金面の困難のために、グリュンヴェーデル（Albert Grünwedel）の指揮する探険隊は、1902年9月まで送り出されることはなかった。

必要額の4万マルクが、民族学博物館、実業家クルップ、博物館のパトロンであるサイモン（James Simon）、そしてベルリン民族学援助委員会からの寄付によって賄われた。グリュンヴェーデルの他、その一行には、東洋学者のフート（Georg Huth）や、博物館スタッフのバルトゥス（Theodor Bartus）も含まれた。彼らは、ウルムチ経由でトルファンへ赴き、イディクト・シャーリ、ベゼクリク、センギム、そしてトユクを調査した。その後、トクスン、カラシャール、クチャ、クムトラ、キジル、アクス、トゥムシュク、マラルバシそしてカシュガルを歴訪した。1903年3月に、探険隊はベルリンへ戻った。グリュンヴェーデルは、1905年に彼らの仕事の成果を出版した。

第1次探険による、桁違いに価値ある成果と所獲品は、ドイツ学界から極めて高い評価を受けた。

63. Forsyth, T.D. *Report of a Mission to Yarkand in 1873*. Calcutta, 1875.
64. Белью [Х.У.]. Кашмир и Кашгар. Дневник английского посольства в Кашгар в 1873-1874 гг. СПб, 1877. ［カシュミールとカシュガル：1873-74年イギリス使節団カシュガル日誌］

その探険は、学術に寄与しただけでなく、博物館にも益をもたらした。東トルキスタンから将来した多くの財宝は、すぐさま陳列された。ピッシェル（R. Pischel）とリューダース（H. Lüders）を長とする、中央アジア・東アジア研究ドイツ委員会は、その仕事の継続を奨励した。続く3回のドイツ（その当時の呼称としては、プロイセン）のトルファン探険は、国家資金によって賄われた。第2次探険は、民族学博物館のル・コック（Albert von Le Coq, 1860–1930）が隊長となった。バルトゥスとともに、彼は、1904年11月から1905年11月の間、トルファン、ヤールホト、センギムそしてベゼクリクで仕事をした。その後彼らはカシュガルに移動したが、グリュンヴェーデル率いる第3次ドイツ探険隊もまた1905年12月にそこへ到着した。2つの探険隊は一緒になり、1907年6月まで協同して働いた。ル・コックは、1906年中頃に健康を害して帰国しなければならなかった。グリュンヴェーデルとバルトゥスは、彼らの仕事を継続し、トルファンより西の、たとえばキジル周辺の仏教石窟寺院などで発掘調査を行った。彼らは、カシュガルからトゥムシュク（1906年1月）へ、その後キジル、クチャ、クムトラそしてコルラ（1906年2月）へ、さらにキリシュ（1906年2月から5月まで）へ進み、広範囲の歴史的遺物を調査した。1906年夏には、彼らはコルラ近くのシクシン僧院群で仕事をし、それからトルファン・オアシスを通って、トユクとハミへ向かった。グリュンヴェーデルの『シナ・トルキスタンの古代仏教祠堂』（*Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, 1912）、そして『東トルキスタンにおける古代ギリシャの痕跡』（*Auf Hellas Spuren in Ostturkistan*, 1926）と題されたル・コックの著書は、それぞれ第2次と第3次の探険を基礎にしている。第4次のそして最後のドイツ・トルファン探険隊は、1913年6月に始まり1914年2月に終了したが、それは第1次大戦勃発直前であった。ル・コックの率いる探険隊は、クチャ近くで発掘をして、主に第3次探険の仕事を継続した。1928年に、ル・コックは報告書を出版した。

名高い中国学者ポール・ペリオ（Paul Pelliot, 1878–1945）を隊長とするフランスの探険隊は、1906年6月15日にパリから出発した。その探険隊には、地形学的・自然科学的調査をも任務とした医師のヴァイヤン（Louis Vaillant）と、写真家のヌエット（Charles Nouette）も同行した。1906年8月に、旅行家たちはカシュガルに到着した。ペリオは、そこで6週間の探査を行い、写本のコレクションを蒐集し、ウチュ・メルヴァン、エスキ・シャール、ハン・オイ、カプタル・カナ、テグルマン、トパ・ティムそしてトペ・シャールといった歴史的遺物を調査した。その後探険隊は、カシュガルの西方を進み、ヘディンが発掘調査したトゥムシュクの古代僧院群まで達した。1907年1月から、彼らはクチャ一帯を調査した。特にドゥルドゥル・アクルを集中的に調査したが、そこでブラーフミー文字のサンプルとともに、200点の漢文写本断簡を発見した。ペリオはスバシ周辺で、さらに多くの写本断簡も発見している。それには、サンスクリット語を書いた木片や、クチャの死語（トカラ語B）で書かれた古文書と木簡も含まれる。クチャで8ヶ月間仕事をした後、探険隊はトルファンとハミ経由で敦煌に進み、そこで1908年2月12日から6月7日まで働いた。千仏洞は、2月27日から5月27日までの間調査された。

敦煌に達した最初のヨーロッパ人であるスタインは、石窟群の網羅的な調査は行わず、蔵経洞の調査に専念した。徹底的な写真撮影と文字記録によって石窟群の調査の功を認められたのは、ペリオであった。石窟を調査するうちに、彼は絹・キャンバス・紙に描かれた絵画とともに、何千という中国語・チベット語・ウイグル語・サンスクリット語の写本を発見した。彼は、仏教やその他多くの宗教文献、古文書類、彫像や絹画を選別し、学術的価値の高いものを蒐集した。1908年9月28日（10月11日）、探険隊は北京経由で帰路につく前に、西安を訪れた。その後北京で、ペリオは写本のうちの何点かを中国人学者に公開した。その結果、中国の学界は、敦煌蔵経洞発見の重大性を認識することとなった。特別委員会が設けられ、1909年に蔵経洞の残存物を北京へ運び出すように政府を説得した。

日本人学者も、西洋の彼らの同業者と同時期に中央アジアで調査を行った。スタインの旅行成果に触発された、日本の第1次東トルキスタン探険は、1902年から1904年の間に行われた。大谷光瑞、渡辺哲信そして堀賢雄は、ロンドンからロシア経由で東トルキスタンに到着した。彼らは、コータンの発掘から始め、次いでクチャへ移動し、キジルとトルファンの歴史的遺物を調査した。その後、ウルムチ経由で日本へ戻った。この大谷探険隊は、文書と美術品のコレクションを将来した。

日本の第2次東トルキスタン探険は、1908-09年に実施された。橘瑞超と野村栄三郎が隊員であった。彼らは、楼蘭、ニヤ、ヤルカンド、マラルバシを歴訪したほか、カラホージャ、ムルトゥクそしてヤールホトを調査した。

1910-14年の第3次日本探険隊を率いたのは、橘瑞超であった。彼は、トルファン、クチャ、カシュガル、コータンで調査を行った。彼が日本に帰国した後も、隊員の1人である吉川小一郎はトルファンで発掘を継続し、アスターナやクチャでは特に歴史的遺物に注意したが、クチャではクムトラとスバシまで到達した。

学者たちは、ロシアもしくは西洋の考古学的探険の成果がその当時何ら出版されていなかったにもかかわらず、緊密な交渉を保ちながら働こうと努力した。

ロシア人学者の、中央・中部アジアの広大な領域におけるスケールの大きな調査は、世界の科学に極めて多大な貢献をなし、今なお有益である。ロシア探険隊の所獲品によって科学的資料は飛躍的に増大し、歴史学、考古学、言語学といった重要なディシプリンに対して新たな根拠となる材料が提供されることとなった。

（岩本明美訳・高田時雄補訂）

ロシアの中央アジア探険隊所獲品と日本学者

高田時雄 *Tokio Takata*

一九六〇年にモスクワで国際東洋学者会議が開催された時、レニングラード（当時）へのエクスカーションが日程に組まれていて、その折りアジア諸民族研究所レニングラード支所を訪れた東西二人の中国学者は思いがけず一群の敦煌写本の展示を目の当たりにすることになる。しかも聞けば同所に所蔵される敦煌写本の総数は一万点に達するというのである。パリとロンドンのコレクションは誰もが知っているが、ロシアにこれほど大量の敦煌写本が眠っていようとは予想できないことであった。いかにも彼らの驚きは想像に余りある。時に一九六〇年八月十四日の午後、二人の学者とはフランスのポール・ドミエヴィルと日本の吉川幸次郎（1904-1980）である。彼らはともにモスクワの会議の中国文献学部会に出席していて、これはその期間内の出来事であった。第二次大戦後、ロシアに大量の敦煌文献が所蔵されていることを西側世界の研究者が知った最初の瞬間である[※1]。ちなみに同じ国際会議の中国史部会にはやはり日本から京都大学の宮崎市定（1901-1995）、東京大学の山本達郎（1910-2001）の二教授が出席し、彼らもまたレニングラードで敦煌写本を見た。山本は帰国後早速史学会の大会で「敦煌発見オルデンブルグ及びペリオ将来戸制田制関係文書十種」と題する報告を行っている[※2]。

この会議に出席した人々のもたらした驚くべきニュースはまたたく間に日本の学界にひろまった。日本では敦煌写本の研究は極めて盛んであり、折しもロンドンのスタイン蒐集写本の写真がすべて日本に将来されたこともあり、五十年代後半から一層の活況を呈していた時期であった。

したがってオルデンブルグが持ち帰った大量の敦煌写本がロシアに存在するという情報は、限りなく日本の学者たちを刺激するものであった。京都大学の藤枝晃（1911-1998）は当時の日本において敦煌学の牽引車的な役割を果たしていた人物だが、ロシア所蔵写本のうわさが確実なものであると知ると、一九六四年秋に予定していたロンドン、パリへの敦煌写本調査に急遽レニングラードを追加することを決めた。その年の春、当時レニングラードの研究所で敦煌写本目録編纂の責任者であったメンシコフ教授と連絡を取った藤枝は、メンシコフから歓迎する旨の丁寧な返事をもらっていた。九月十二日にレニングラードに着いた藤枝は、十数日のあいだ敦煌写本の調査で文字通り興奮に満ちた時間を過ごしたのであった[※3]。

---

1 ドミエヴィルは先ず国際東洋学者会議の開催を報じる文章で簡単にロシアの敦煌写本について触れ、メンシコフ『目録』が出版された後にやや詳しくロシア所蔵敦煌写本を概観する文章を発表した。一九六〇年の出来事はそれらの中に語られている。Paul Demiéville, “Chronique: Le XXVe congrès international des orientalistes”, *TP*, vol. XLVII (1959), 426-429.;“Manuscrits chinois de Touen-houang à Leningrad”, *TP*, vol. LI (1964), 355-376。一方、吉川はやはり帰国後、会議の出席報告と紀行文の中でこの時のことに言及する。吉川幸次郎「東洋学者会議出席報告」『東方学会報』1961年1月、「泰西風物：レニングラード」『新潮』1961年5月号、両文ともに『西方からの関心』（東京：新潮社、1961年）に再録され、更に『吉川幸次郎全集』第十九巻（東京：筑摩書房、1969年）に収められた。いま『全集』本に拠る。その376、396-397頁。
2 その発表要旨は『史学雑誌』第69編第12号（1960.12）90-91頁に掲載されている。
3 藤枝晃「レニングラードの東洋学アルヒーフ」『図書』（岩波書店）、1966年1月号、37-40頁。

藤枝がレニングラードを訪問する一月余り前、モスクワで開催された第七回人類学民族学国際会議に出席した京都大学の小川環樹（1910-1993）も、会議の終了を待たずにレニングラードの研究所を訪問し、メンシコフ氏を通じてオルデンブルグ蒐集の敦煌写本やコズロフによってカラホトで発見された西夏語文献を見学している[※4]。小川は短い時間のうちに何点かの敦煌文献を筆写して帰った。それらのうち『毛詩音』残巻の手抄本は、平山久雄に提供され、その詳細な音韻学的研究に利用された[※5]。

その前年の一九六三年には、メンシコフ等ロシアの学者が編纂した『敦煌写本目録』の出版が開始され[※6]、またいくつかの文献のファクシミリ版も出版されていた[※7]。こういった出版物を通じてロシアの敦煌写本は国際的にも益々注目を浴びることとなり、七〇年代、八〇年代には多くの外国人敦煌研究者がレニングラードを訪問するようになる。藤枝は一九七〇年にも再びレニングラードを訪れるが、同じように敦煌写本を求めて同地に赴く日本学者の数は少なくなかった。一九九二年に上海古籍出版社から『俄蔵敦煌文献』が刊行されはじめ、必ずしもロシアまで行かずともロシア所蔵の敦煌文献を利用できるようになった後も、日本学者のペテルブルグ詣では跡を絶たないのが現状である。

敦煌写本の研究は日本の中国学乃至東方学のなかでも一貫して重視されてきた、いわば特別な領域であった。そのため一九六〇年以降のロシア所蔵写本“再発見”が一層大きなセンセーションを巻き起こしたのは理由の無いことではない。ではそれ以前の時代にロシア探険隊の所獲品について日本の学者が全く没交渉であったのかと言えば、決してそうではない。むしろ日本学者の果たした役割には少なからず重要なものがある。以下に主として第二次世界大戦以前のロシア所獲文献と日本学者の関わりについて瞥見してみたいと思う。

狩野直喜，1868-1947

内藤虎次郎，1866-1934

最初に取り上げるべきは狩野直喜（1868-1947）である。狩野は明治の末年、草創間もない京都大学において中国文学及び哲学の講座を担当した。同僚に歴史学者の内藤虎次郎（1866-1934）がいたが、彼らは折しも革命の難を避けて京都に客居した中国の羅振玉（1866-1940）、王国維（1877-1927）等と協力して大いに敦煌学を鼓吹し、その発展に貢献した。狩野は一九一二年秋、敦煌写本調査のため欧州に赴くことになり、その途次ペトログラードを訪れた。その時、狩野は偶々コズロフ（П.К.Козлов）がカラホト遺跡から将来したばかりの文献に接する機会を得た。狩野は京都の同僚たちに宛てた公開書簡の中で、西夏語文献のほか、カラホト発見の漢文文献の幾つかに言及し、その「学術的価値は敦煌写本に匹敵すべきもの」と高く評価しているが、特にそれらのうち宋槧列子断片、宋槧呂観文進注荘子、雑劇零本、宋槧広韻断片などの書名を挙げている[※8]。狩野はまた数多くの精巧な仏画の存在に言及するとともに、有名な平陽姫家彫印の四美人の版画について「珍の又珍なるもの」と絶讃したうえ、その写真を持ちかえった[※9]。滞在中、狩野はイワノフ（А.И.Иванов）及びアレクセイエフ（В.М.Алексеев）と交流を深め、ラードロフ（В.В.Радлов）やシュテルンベルグ（Л.Я.Штернберг）といった学者とも会った。

狩野の「文選跋」自筆原稿

これは後の話になるが、一九二八年、狩野の還暦記念に際して、アレクセイエフは上記の『劉知遠諸宮調』とオルデンブルグ敦煌蒐集中の『文選』の写真とを狩野に提供した。それには当時大阪外国語学校に奉職し、京都大学の講師を兼ねていたネフスキー（Н.А.Невский）の熱心な仲介があったとされる[※10]。後者の敦煌本『文選』に就いて、狩野は漢文で「唐鈔本文選残篇跋」を認め『支那学』誌上に発表したが[※11]、この論考はほぼ同時に当時日本に居たシューツキー（Ю.К.Щуцкий）がロシア語に翻訳し、アレクセイエフの推薦によりソビエト連邦科学アカデミーの紀要に掲載された[※12]。ロシア所蔵敦煌漢文文献に対する最初の本格的な研究として、また東方学の分野における日本とロシアの学術交流史の第一頁を飾る事例として、この一文は記念碑的な意味を有する。一方、『劉知遠諸宮調』は、やや遅れて一九三二年に、狩野の高弟青木正児（1887-1964）による詳細な研究が同じ『支那学』に掲載され[※13]、文学史的な価値が闡明されるとともに、学界の大きな注目を集めた。

狩野に遅れること二年、京都大学の新進学者であった羽田亨（1882-1955）がロシアへ出張を命じられ、短い期間ながら露都に滞在した。主たる目的はラードロフについてウイグル語を学習するためであり、当時出来上がったばかりの大谷探険隊将来ウイグル文「天地八陽神呪経」の翻訳を攜えてラードロフの意見を叩いたが、ラードロフは羽田の帰国後ただちに同経典の断簡数種を送って寄越し、研究の進捗を助けた。それら断簡はオルデンブルグ（С.Ф.Ольденбург）の第一次探険隊、クロトコフ（Н.Н.Кротков）等の将来品であり、そのうちの一点は実に大谷本に欠けた巻首を補うものであった。羽田は早速、論文の補遺を公刊するとともに、ラードロフの好意に感謝を表明している[※14]。のちラードロフの逝去の報に接した羽田は、「ラードロフ博士」という一文を草して、当時の交遊を回顧すると共に、その生涯と学問を詳しく紹介している[※15]。狩野から話を聞いていたこともあり、羽田はイワノフの東道によってコズロフ隊の将来資料を種々見学したことも報告されているが、それらに就いて直接に研究を進めることはなかった。

羽田亨，1882-1955

4　小川環樹「レニングラードのこと」『図書』1965 年 1 月号、のち『談往閑語』（東京：筑摩書房、1987 年）及び『小川環樹著作集』第 5 巻（東京：筑摩書房、1997 年）に再録。いま『著作集』の 453-458 頁による。

5　平山久雄「敦煌毛詩音残巻反切の研究（上）」『北海道大学文学部紀要』14-3（1966）, 4 頁。

6　Описание китайских рукописей Дуньхуанского фонда Института народов Азии. выпуск 1, Москва, 1963; выпуск 2, Москва, 1967.

7　例えば、Рукописи из Дуньхуана. Памятники буддийской литературы сувенсюэ. Издание текстов и предисловие Л.Н.Меньшикова. Москва, 1963; Бяньвень о Вэймоцзе, Бяньвень «Десять благих знамений», Издание текста, предисловие, перевод и комментарии Л.Н.Меньшикова. Москва, 1963.

8　狩野直喜「海外通信（一）」『芸文』第四年第一号、1913 年 1 月、のち『支那学文薮』（東京：みすず書房新版、1973 年）に再録、その 332-335 頁。ちなみに狩野が雑劇零本というのは有名な『劉知遠諸宮調』のことである。現在カラホトの漢文文献にはメンシコフの編になる目録があり、その番号を用いて言えば、最初の列子を除いて、これらの文献はそれぞれ 260、274、280 番に当たる。不思議なことに列子はメンシコフ目に見えないが、或いは狩野が荘子（261）と取り違えたものかも知れない。Л.Н.Меньшиков, Описание Китайской части коллекции из Кара-Хото (фонд П.К.Козлова), Москва, 1984 を参照。

9　該図は 1916 年 3 月の『芸文』第七年第三号誌上に、植田寿蔵（1886-1973）の解説を附し、口絵として掲載された。写真のガラス乾板は現在京都大学人文科学研究所に保存されている。四美人の図はまた美術史家滝精一（1873-1945）によって批評紹介された。節庵（滝精一）「黒城発掘の古版画」『国華』第 349 号（1919 年 12 月）。滝は早くからコズロフ将来の絵画に注目し、それらの紹介に努めた。滝精一「中亜の発掘品と我浄土教美術の起源」『国華』296 号（1915 年 1 月）、同「黒城発掘来迎図」『国華』同号。

10　神田喜一郎「狩野先生と敦煌古書」『東光』第 5 号（1948）、46 頁。

11　『支那学』第五巻第一号（1929 年 3 月）、153-159 頁。この文章はまた『東洋学叢編』第一冊（静安学社編、東京：刀江書院、1934 年）にも収められ、また著者の『読書簒余』（京都：弘文堂書房、1947 年：新版は東京：みすず書房、1980 年）、『君山文』（京都、1959 年）にも再録されており、そのうち『東洋学叢編』のものには写本のファクシミルも附載されている。ちなみに『支那学』の同じ号には、上記「四美人図」に関する那波利貞の詳細な研究が見えている。那波利貞「コヅロフ氏発見南宋時代版画美人図攷」『支那学』第 5 巻第 1 号（1929 年 3 月）。

12　Н.Кано, О фрагменте старой рукописи «Литературного изборника», хранящегося в Азиатском музее Академии наук, ИАН СССР, ОГН, 1930, сер. VII, № 2, С.135-144. このロシア語論文については、ペリオによる簡単な紹介がある。*TP*, XXVIII, 1931, 165-166.

13　青木正児「劉知遠諸宮調考」『支那学』第六巻第二号、1932 年、21-56 頁。

14　羽田亨「回鶻文の天地八陽神呪経補遺」『東洋学報』第五巻第三号、1915 年 9 月、401-407 頁。なお該論文の本編は『東洋学報』第 5 巻第 1 号（41-78 頁）、2 号（189-228 頁）に掲載されている。

15　羽田亨「ラードロフ博士」『芸文』第十年第七号、1919 年 7 月、704-712 頁。

狩野と羽田が露都を訪問したころ、オルデンブルグの敦煌写本はまだ到着していなかったから、それを見ることが出来なかったのは当然である。それを始めて眼にしたのは矢吹慶輝(1879-1939)である。精力的にスタイン将来の仏教文献を研究し、大著『鳴沙余韻』『三階教の研究』を著した矢吹は、一九一六年十二月、その第二回のロンドン行の帰途にペトログラードに立ち寄り、到着してまもない敦煌古写本を閲覧した。彼はシルヴァン・レヴィの紹介でオルデンブルグに面会し、オルデンブルグから更にアジア博物館のアレクセイエフを紹介してもらい、その世話で数百点の古写本を見たのだという。

矢吹慶輝，1879-1939

矢吹の報告はごく簡単なものであるが、目睹し得た経巻のうち二十点ほどの文献の巻末識語が記録されている[※16]。その末尾には敦煌文献のなかでも最も新しい紀年とされている宋の咸平五年(1002)「燉煌王曹宗寿編造帙子入報恩寺記」がそこにすでに見えるのが注意される。矢吹は筆記が国境で没収されることを恐れ、前もって二通の写しを作り、一通を書簡として郵送し、一通を攜帯したと語っていて、その苦心を想像させるが、この報告は必ずしも充分に日本の学界に注意されたとは言えないようである。

日本ばかりではなく、外国の学者もこの時期にロシアの敦煌写本について触れたものはない。矢吹のこの短文はあるいはこの時期にオルデンブルグの敦煌写本を外国人が実際に見て書いた報告として唯一のものかも知れない。事実、上で見たように、一九六〇年の時点まではロシアに敦煌写本の存在することを世界のほとんどの学者が知らなかったのである。革命とその後の政治的混乱はロシア国内においても敦煌写本に多大の関心を寄せる状況にはなかったようで、僅かにフルーク(К.К.Флуг)が二十世紀の三〇年代にその整理に手を着けただけあった。一九四二年に彼が不幸な死を遂げたあとは、その仕事を継続する者はなく、一九五七年になってようやくメンシコフ等のグループが本格的に目録作成に乗りだすまで放置されるのである[※17]。もちろんソビエト時期の国際環境を考慮すれば、たとえ矢吹の報告に触発されたとしても、敦煌写本の研究を目的としてソ聯に出かけるなどということはよほど困難なことであっただろう[※18]。

ところで第二次大戦前に、日本の学者として、ロシアにも敦煌写本が存在することに気付いていた人物に石浜純太郎(1888-19688)がいる。石浜は自身でロシアの土を蹈むことはなかったものの、ロシアの探険隊の業績とその将来品に深い関心を寄せていた。彼は東京大学で中国文学を修めたが、父の早逝によって一九〇一年の卒業とともに郷里の大阪に戻り、家業の製薬会社を継承した。内藤湖南(虎次郎)に私淑し、後に在野の学者として八面六臂の活躍をすることになるこの人物はまた、中国本土はもとより、満蒙から中央アジア、インドに至るまでの、きわめて幅広い領域に興味をもち、恵まれた経済的条件を十二分に活用して、東洋学に関する非常に豊富なコレクションを作り上げた[※19]。特に当時としては珍しくロシアの文献を積極的に収集していた彼は、ロシアの学術動向を誰よりも熟知していた。彼は一九二七年の『支那学』に寄せた一文中で、新着のロシア雑誌に載ったローゼンベルグ(Ф.Розенберг)の論文のタイトルに「(オルデンブルグ隊将来の)敦煌千仏洞出土」とあるのを

石濱純太郎，1888-1968

16 矢吹生「露都ペトログラードに於ける古経跋及疏讃類」『宗教界』第13巻第5号、1917年、407-409頁
17 Л.Н.Меньшиков, Описание, предисловие を参照。
18 1932年、東京大学の中国文学教授であった塩谷温(1878-1962)がヨーロッパへの途次、偶々レニングラードを訪れ、コンラートや、ネフスキー、チュースキーに会い、西夏文献などを見たことを記録している。しかし彼が目的とした『劉知遠諸宮調』は結局本箱の鍵が見つからず観ることが出来なかったと書いている。また敦煌写本については一言も触れるところがない。塩谷温『王道は東より』、昭和九年、東京・弘道館、237-8頁。
19 その全蔵書四万二千二百余冊はのち大阪外国語大学に帰し、石浜文庫として保存されている。その目録は『大阪外国語大学石浜文庫目録』(1977年、大阪外国語大学附属図書館編)として公刊されている。

見て、オルデンブルグ第二次探険隊の所獲品のことを知り、さらに論文の記述から所獲品の大部分が漢文文献で、あとはソグド文二葉、梵文、ウイグル文、西夏文の断片であること、そしてアレクセイエフが目録作成中であると述べている[※20]。フルーク以前にアレクセイエフが目録に着手していたという情報は、かつて矢吹が敦煌写本を見るに当たって、オルデンブルグがアレクセイエフを紹介したということと考え合わせれば納得が出来る。当初、オルデンブルグの敦煌写本の整理はアレキセイエフに委ねられていたものらしい。ただ石浜がどうも上記矢吹の報告を知らなかったらしいことは、その博識を考えるとやや意外な感がする。さらにせっかくの石浜の指摘[※21]を後の学者たちが看過していたのも不思議な話であるが、様々な意味で余りにも遠いロシアのことであってみれば、学界全体に充分な認識が確立しなかったのは致し方ないかも知れない。

ロシア探険隊所獲品の研究を語るに際して、我々は石浜の西夏語に対する貢献についても忘れず触れるべきであろう。それはロシア人学者ニコライ・ネフスキー(Н.А.Невский, 1892-1937)との協力によって生み出された。一九二二年、石浜は設立されたばかりの大阪外国語学校の蒙古語部に専科生として入学し、二年間モンゴル語を学んだ。蒙古語の講師は京都大学から出講していた羽田亨であった[※22]。その時、ネフスキーもちょうど小樽高等商業学校から転じて大阪外国語学校のロシア語教師となったばかりで、二人はこの学校で運命の出会いをすることとなる。ペテルブルグ大学の中国・日本学科で学んだネフスキーは、一九一五年に大学から二年間の予定で日本留学を命じられ、コンラート(Н.И.Конрад)やローゼンベルグ(О.О.Розенберг)等とともに東京で勉学に励んだ[※23]。やがてロシアで革命が勃発すると、恩師アレクセイエフの勧めもあり当面帰国を取りやめ日本で様子を見ることとしたが、ロシアからの送金が途絶えたため、生活の道を探らざるを得ず、東京の亡命ロシア人の経営する商社に勤務した。その後、一九一九年からは小樽高商でロシア語の教師をしていたのである。この頃のネフスキーの関心は日本民俗学であり、柳田国男(1875-1962)、折口信夫(1887-1953)、中山太郎(1876-1947)などと頻繁に交遊した。さらに北海道への赴任をきっかけに金田一京助(1882-1971)のアドバイスを受けつつ、アイヌ語の研究を始め、また琉球の宮古方言の研究にも手を伸ばした。大阪に移ってからも相変わらず民俗学や方言の研究に強い関心を持ち、大阪外語の同僚であった浅井恵倫(1895-1983)とともに台湾で現地住民の言語調査も行っている[※24]。

しかしネフスキーは次第に石浜の強い勧めによって西夏語の研究にも手を染め、石浜と二人三脚で数多くの論考を発表することになる[※25]。ネフスキーは一九二五年には大学時代の恩師の一人イワノフを北京に訪ねて西夏語文献の提供を受け[※26]、またレニングラードの同僚に頼んでロシアに所蔵する文献の写真を送ってもらった。石浜としてはロシアの材料が入手できる便があり、ネフス

20 石浜「敦煌雑考」『支那学』第四巻第二号(1927年3月)、147-148頁、第二節「露国の蒐集」。ローゼンベルグの論文は、Fr.Rosenberg, Deux fragments sogdien-boudhiques du Ts'ien-fo-tong de Touen-houang (Mission S. d'Oldenburg 1914-1915), *Mélanges Asiatique, tirés du Bulletin de l'Académie des Sciences de Russie.* Nouvelle Série. 1918.
21 石浜はまた別の機会にもオルデンブルグ蒐集敦煌写本の存在に言及している。石浜純太郎「ロシアの東洋学」『東洋史研究』第一巻第六号(1936年8月)、のち『東洋学の話』(1942年、東京:創元社)に収録、その240頁。
22 『大阪外国語大学70年史』(同刊行会、1992年)、15頁。
23 ネフスキーはそれ以前、一九一三年の夏休みにも東京に滞在し、日本文学を研究したとされるが、詳しい動静は分からない。ちなみにネフスキーの生涯については、ロシア語では Л.Л.Громковская и Е.И.Кычанов, Николай Александрович Невский. Москва, 1978、日本語では加藤九祚『天の蛇――ニコライ・ネフスキーの生涯』(東京:河出書房新社、1976年)があったが、近年の新しい知見を盛り込んだグロムコフスカヤ(Л.Л.Громковская)編「ネフスキー特集」が『ペテルブルグ東方学』第八巻中に収められ(Николай Невский. Переводы, исследования, материалы к биографии, Петербургское Востоковедение, выпуск 8, Санкт-Петербург, 1996, С. 239-560.)、ネフスキーの論文や翻訳、書簡、伝記資料などの新しい資料が公開されたが、最近日本でもその成果も取り入れつつ各種資料を網羅した生田美智子編『資料が語るネフスキー』(大阪外国語大学、2003年)が出版された。小文は多くをこれらの先行研究に負っている。
24 これらの研究成果の一部はネフスキーのロシア帰国後、科学アカデミーの紀要に発表され、また七〇年代以降になって遺稿が整理され公刊された。Айнский фольклор / сост. Л.Л.Громковская. Москва, 1972; Фольклор островов Мияко /сост. Л.Л.Громковская. Москва, 1978; Материалы по говорам языка цоу: Словарь диалекта северных цоу /сост. Л.Л.Громковская. Москва, 1981.
25 このあたりの事情は石浜自身が語っている。石浜純太郎「西夏語研究の話」『徳雲』第五巻第三号(1934年11月)、のち『東洋学の話』に収録、その194頁以下を参照。
26 北京から石浜純太郎に宛てた二枚の葉書が大阪外国語大学の石浜文庫に残っている。『資料が語るネフスキー』162-163頁。

キーとしては石浜の豊富な蔵書を参考資料として利用できる利点があった。結局、一九二七年から一九三三年までのあいだに彼らが連名で発表した論文は七編に及ぶ。それらはすべて日本において日本語で発表されたものである[※27]。一九二七年七月、高橋盛孝の提案に賛成するかたちで、石浜とネフスキーは浅井恵倫、笹谷良造（1901-?）等と語らって“静安学社”（Societas Orientalis Osaka'ensis in memoriam Wang Kuo-wei）を起こした。静安とは近代中国の傑出した学者王国維の字であるが、王はこの年の五月に北京の清華園昆明湖に身を投げて自死したばかりであった。その王国維を記念して学会の名称にしようと言い出したのはネフスキーであったという[※28]。この学会にはネフスキーの関係でプレトネル（О.В.Плетнер）、コンラート、シューツキーといったロシア人学者の名が社員乃至社友として名を連ねている。その第一回集会にはちょうど来日していたコンラートが「サウェトロシアに於ける東洋学研究」と題する講演を行った[※29]。この学会が東洋学における日本とロシアの学術交流に果たした役割は無視し得ないものがあるが、それは主として石浜とネフスキーの協力関係の上に築かれていたのである。彼らの西夏語の研究成果は逐次この学会の例会で報告された。

ネフスキーはまた日本の友人がロシアに行くときには、必ずレニングラードの同僚たちへの紹介状を書いた。石浜純太郎は師と仰ぐ内藤湖南が一九二四年七月から約二ヶ月、ヨーロッパへの敦煌写本調査に出かけた際、それに同行した。しかし一行は「帰途ロシア、アメリカ旅行を企つるもいずれも果たさず」[※30]、マルセーユより海路帰国した。結局使われずに終わったネフスキーのアレクセイエフ宛の紹介状が石浜文庫に残されている[※31]。また一九二九年春、ヨーロッパ留学に際し、往路ソ聯に滞在する予定であった民族学者岡正雄（1898-1982）に対して、ネフスキーはイワノフやコンラートに宛てた紹介状を書くとともに、西夏文書の写真撮影を依頼している[※32]。ネフスキーは日ロ学術交流の架け橋の役割を果たしていた。

一九二九年九月、ネフスキーがソ聯に帰り、レニングラード大学の助教授となった後も、二人の協力関係は継続した。その連絡の様子は当時ネフスキーが石浜に宛てた書簡から窺うことが出来る[※33]。ネフスキーは西夏語研究の進展について書いて寄越すとともに、しばしば石浜に参考資料の送付を依頼し、石浜もそれによく応えたようだ。石浜はまたこの頃アレクセイエフの依頼に応えて、ネフスキーの業績に関する報告を書いている[※34]。おそらくアレクセイエフがネフスキーをアカデミーに推薦するかなにかのために、ネフスキーの学術活動を最もよく知る石浜に依頼したものであろう。しかしやがて時代は暗転し、一九三七年十月、ネフスキーは突然逮捕され、翌月“人民の敵”として銃殺された。その名誉回復は二十年後の一九五七年、そしてようやく一九六〇年になりネフスキーの西夏語に関する遺稿が『西夏文献学』[※35]として出版され、その二年後にはレーニン賞が授与された。石浜とネフスキーの共同研究は突然の不幸な出来事によって終末を告げることとなった。しかし彼らの蒔いた西夏語研究の種は日本とロシアの双方で芽を吹き、西田龍雄やクィチャノフ（Е.И.Кычанов）等の手によって大きな進展を見ることになる。

管見の限りでは、戦前期の日本学者とロシア探険隊所獲品との関わりは、少なくとも文献研究については以上に尽きる。しかし最後にもう一つ日本人学者の貢献について附言すべきことがある。

27　ここには一々論文名を挙げない。「石浜純太郎先生著作目録」『石浜先生古稀記念東洋学論叢』（石浜先生古稀記念会、1958年）、及び「ネフスキー著作目録」250-253頁を彼此参照されたい。
28　石浜純太郎「静安学社」『芸文』第十八年第八号（1927年8月）65頁。
29　上掲『資料が語るネフスキー』36-46頁「静安学社」の項を参照。
30「石浜純太郎先生年譜略」『石浜先生古稀記念東洋学論叢』、7頁。
31『資料が語るネフスキー』185頁。
32　ネフスキー『月と不死』（東京：平凡社、1971年）への岡正雄の序文、4頁。
33『資料が語るネフスキー』144-161頁。
34　ロシア科学アカデミー文書館資料 Ф. 820 (В.М.Алексеев). Оп. 4, ед. хр. 53. Исихама Джунтаро. Отзыв о научных трудах и научной деятельности Н.А.Невского.
35　Тангутская филология: исследования и словарь. Кн. 1-2, Москва, 1960.

それは梅原末治（1893-1983）のノイン・ウラ発見遺物の研究である。コズロフは一九二四年～二五年にウランバートル北方のノイン・ウラの古墳群で大量の匈奴の文物を発見した[※36]。これはカラホト遺跡の発見とともに、コズロフの二大業績の一とされているものであり、現在エルミタージュ博物館では、ノイン・ウラ遺跡の展示に特別の一室が設けられている。一九二六年夏、梅原はケンブリッジ大学のミンス（Ellis H. Minns）の紹介でたまたま英国を訪れたオルデンブルグに会った。その時の会話がきっかけとなって、翌一九二七年の秋レニングラード行が実現した。梅原はかくしてコズロフが持ち帰ったノイン・ウラ発見の遺物を調査する機会を得ることとなる。梅原は翌年の秋にも再びロシアの土を踏み、研究を続行した。当時のロシア当局が新発見の発掘物の研究を外国人に委ねたという事実は特筆に価するが、残念ながらその成果の公刊は戦争により遅延し、一九六〇年になってようやく東京の東洋文庫から出版された[※37]。ノイン・ウラの文物にはスキト・サルマティア系の特徴が認められるが、副葬品は漆器や絹織物など中国からもたらされたものが大部分を占める。いずれも当時の匈奴貴族の生活を窺う貴重な資料である。

一九三〇年、日本では東亜考古学会の計画として日ソ間の文化交流に道をつけるため学者を派遣することになった。たまたま予定されていた羽田亨が父君の病気と自身の体調不良のため、急遽梅原が代理としてソ聯邦を訪れることになった。この時期のソ聯は数年前とは社会情勢が一変しており、緊張した雰囲気が感じられたという。ともあれレニングラードでは新たに天山北部のシベとパズィリックから出土した馬具などを見学した。注目すべきはオルデンブルグのもたらした千枚を越す敦煌千仏洞壁画の写真を眼にしたと言っている点である[※38]。これらの写真は今もペテルブルグの東方文献研究所に保存されており、最近中国からその一部が出版された[※39]。

以上は日本人がロシアの中央アジア探険隊所獲品に関与した事例を各種の資料から拾い集めてみたに過ぎない。それらはほとんどコズロフとオルデンブルグの所獲品に集中していることが分かる。しかしロシアの中央アジア探険隊のもたらした発掘品は勿論それにとどまるものではなく、トルファン地区をはじめとして多くの遺跡から多様な材料が発見されていることは周知の通りである。戦前期の日本人はロシア探険隊の成果について詳しい情報を持たなかったし、それらの豊富な発掘物に接触することが出来なかったのは、時代状況を考えればやむを得ない。しかし過去十数年のあいだに、日本とロシアの新たな協力関係は着実な進展を見せ、すでにロシア所蔵文献の共同研究の成果も幾つか生まれつつある。ロシア探険隊の成果の全貌が明らかになりつつある今こそ、日ロ間の更なる協同が強く期待される。

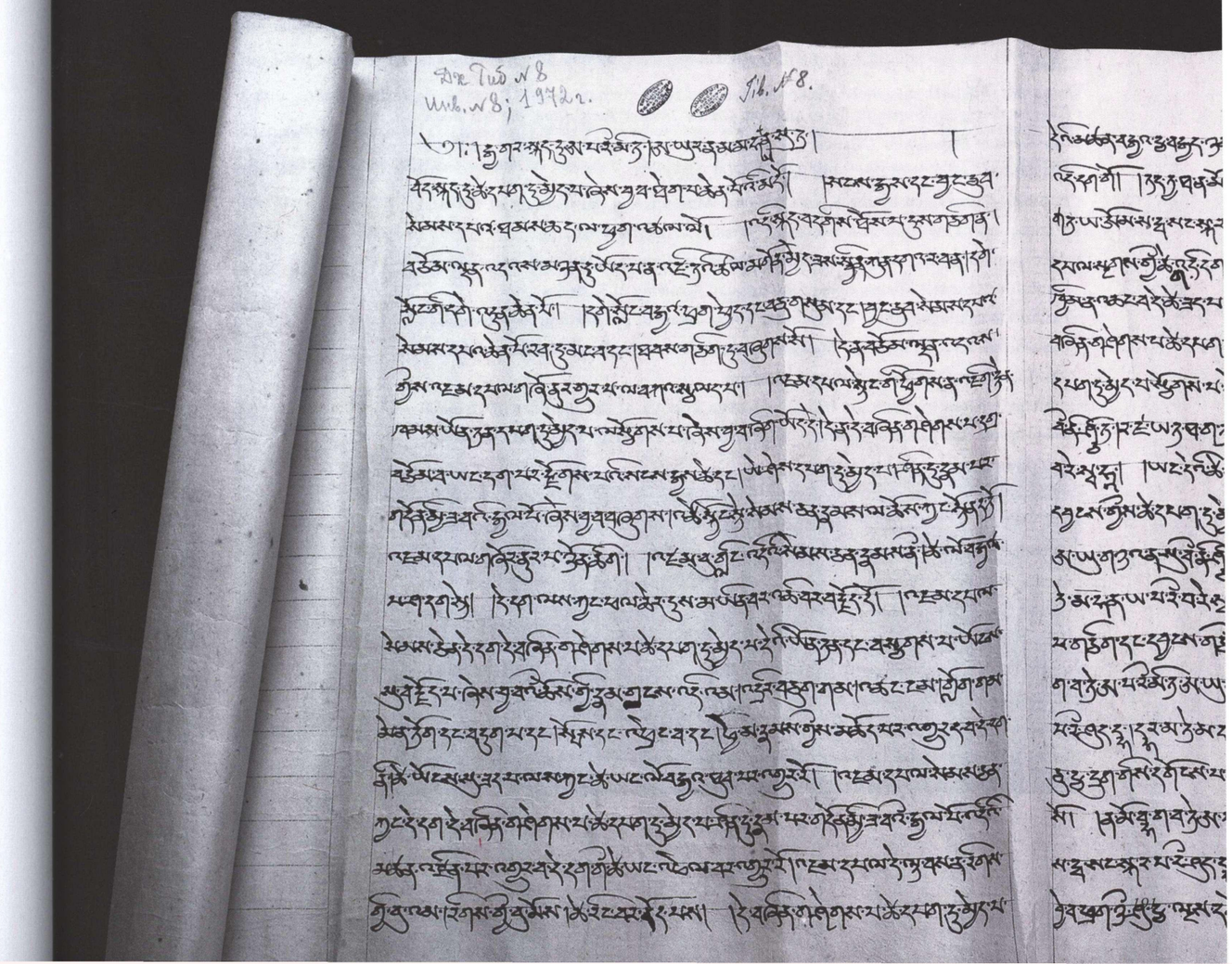
36　この発見については以下を参照。Краткие отчеты экспедиций по исследованию Северной Монголии в связи с Монголо-Тибетской экспедицией П.К.Козлова. Ленинград, 1925. 英語による紹介は前者に拠った P.Yetts, “Discoveries of the Kozlov Expedition“, *The Burlington Magazine,* Vol. XLVIII (1926), 168-185. があり、日本語では以下の羽田亨の紹介が要領を得ている。羽田「外蒙古におけるコズロフ氏の発掘」『朝日新聞』（東京）1927年3月6日～9日、のち『羽田博士史学論文集』下巻、569-580頁。また近年、コズロフによるこの最後の調査の日記が公刊され、それによって発掘の様子がよく分かるようになった。Петр Кузьмич Козлов. Дневники Монголо-Тибетской экспедиции 1923-1926. (Научное наследство, том 30), Санкт-Петербург, 2003.
37　梅原末治『蒙古ノイン・ウラ発見の遺物』（東洋文庫論叢第27冊）、東京：東洋文庫、1960年。
38　以上、梅原とロシアとの関わりはすべて、梅原末治『考古学六十年』（東京：平凡社、1973年）によった。その83、104-111、122-125、149-155頁を参照。
39『俄羅斯国立艾爾米塔什博物館蔵敦煌芸術品』第六巻、上海古籍出版社、2005年。

SPECIAL EXHIBITION

ON THE TRAIL OF TEXTS ALONG THE SILK ROAD

Russian Expeditions Discoveries of Manuscripts in Central Asia

KYOTO NATIONAL MUSEUM



SPECIAL EXHIBITION

ON THE TRAIL OF TEXTS ALONG THE SILK ROAD

Russian Expeditions Discoveries of Manuscripts in Central Asia

KYOTO NATIONAL MUSEUM

Notes

- This catalogue accompanies the exhibition, *On the Trail of Texts Along the Silk Road: The Russian Expeditions Discovery of Manuscripts in Central Asia*, held at the Kyoto National Museum from July 14 to September 6, 2009.
- Exhibition organized by the Kyoto National Museum and the Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences in Saint Petersburg.
- All exhibited works, except for one from the State Hermitage Museum, belong to the Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences.
- Exhibition catalogue edited by Professor Tokio Takata of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University (Research member, Kyoto National Museum) and Eikei Akao, curator of the Kyoto National Museum.
- Articles written by Director Irina Fedorovna Popova of the Institute of Oriental Manuscripts, the Russian Academy of Sciences, and Professor Tokio Takata. Section descriptions written by Eikei Akao.
- Description of works written by Kyoto National Museum curators Eikei Akao (A.E.) and Yoshitoyo Ōhara (O.Y.), and research members of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University, Tokio Takata (T.T.), Gao Qian (G.Q.), Masahiro Tsuji (T.M.), Norihiro Matsuura (M.N.), Yu Xin (Y.X.), Noriyuki Fujii (F.N.), Tomoyuki Nagata (N.T.), and Kazushi Iwao (I.K.). The author's initials appear in the Japanese order of surname first for each description after the respective entry.
- English text except titles in list works translated from the Japanese by Maya M. Hara.
- Photographic credits: all images provide by the Institute of Oriental Manuscripts, the Russian Academy of Sciences, except for the work from the State Hermitage Museum.
- Catalogue entry numbers correspond to the exhibition labels but not necessarily to the order of display in the exhibition. All measurements appear in centimeters.

Chapter. 1 Khotan

Khotan—now known as Hetian—was a prosperous ancient city located between the Yurungkash (White Jade) and Karakash (Black Jade) rivers that run along the southern edge of Tarim Basin, in the southwest of the Xinjiang-Uygur Autonomous Region. Called Yutian in ancient times in China, this kingdom served as a strategic site along the southern route of the Western Region and prospered as a crossroad for China, India, and Iran since the Han dynasty.

Visited by the Buddhist pilgrims Faxian (337–422) and Xuanzang (602–664), this place was called Kustana in chapter twelve of his *Great Tang Records on the Western Regions* by the latter, who introduced it as a land where Buddhism prospered. He wrote, "The Buddhist law is revered, and more than one hundred temples and five thousand monks exist there. Many study and practice the teachings of Mahāyāna Buddhism, and the king himself is a devout Buddhist." Xuanzang also recorded several tales of this land—the most famous tales being the legend of the sacred rats and the origins of the silkworm mouths.

The highlights from Khotan in this exhibit include: A segment of the Buddhist scripture *Dhammapada*, hand copied onto the bark of white birch around the first to second century; a manuscript important not only as one of the earliest Buddhist texts but in looking at the history of early books and codices. The Kāsyapa chapter of the *Ratnakuta Sutra* (J., *Daihōshakukyō*; Ch., *Da baoji jing*), a scripture representing the early Mahāyāna Buddhist teachings, written in the Brahmi script on papers like palm leaves. This work has been dated to the seventh to eighth century, making it the world's only Kāsyapa chapter in Sanskrit that is almost completely in tact. Other exemplary works include primarily Mahāyāna Buddhist scriptures such as the *Lotus Sutra* (J., *Hokekyō*), the *Parinirvāṇa Sutra* (*Daihatsu nehangyō*), and the *Diamond Sutra* (*Kongōkyō*), many of these written in Sanskrit, Gandhari, Khotanese, and Sogdian, on papers like palm leaves.

Chapter. 2 Kucha, Karashar, and Turfan

Kucha

Lying at the foot of the southern range of Mount Tianshan, north of the Tarim Basin, in the Xinjiang-Uygur Autonomous Region, this oasis town once served as a major crossroad of East-West trade along the northern edge of the Western Region. Burgeoning as the kingdom of Qiuci during the Han dynasty, chapter one of the *Great Tang Records on the Western Regions* refers to Kucha as Quzhi and describes it as a place where Buddhism flourished. The records indicate Kucha as having "over a hundred temples, more than five thousand monks, and a place where the Sarvastivādin school of Theravāda Buddhism was practiced and the Buddhist teachings and precepts were modeled after India." Kucha is renowned for the Thousand Buddha Caves of Kizil in its outskirt and for being home to Kumārajīva, the illustrious translator of Buddhist scriptures such as the *Lotus Sutra* and the *Amitābha Sutra*.

Karashar

This oasis town, now known as Yanqi in Chinese, was situated between Turfan and Kucha, near the Turfan border. Chapter one of the *Great Tang Records on the Western Regions* referred to it as the kingdom of Agni and described it as a land with "ten or more temples and over two thousand monks, where the Sarvastivādin school of Theravāda Buddhism was practiced and which abided by India for teachings in the Buddhist scriptures and the precepts." Three works, including a letter in Sogdian and a document in Uygur, will be shown in this exhibition.

Turfan

Situated in the south of the Xinjiang-Uygur Autonomous Region in China, this ancient kingdom was an oasis in the middle of the Turfan Depression. On its outskirts are the Jiaohe Ruins, the old palace of Gaochang, and the Bezeklik Thousand Buddha Caves. The manuscripts excavated there include texts written in classical Chinese, Uygur, and Sanskrit. Although most of these artifacts from the temple ruins are fragmentary, these documents from the Western Region occupy an important role parallel to the Dunhuang manuscripts.

Chapter. 3 Dunhuang

Known as a once-flourishing oasis town that served as an entryway from China to the Western Regions, Dunhuang today is located in western Gansu Province in China. This city gained world renown in the modern era through the discovery of the Dunhuang manuscripts. About one hundred years ago, exploration parties from England, France, Germany, and Russia, and the Otani Expedition from Japan, headed to Central Asia, primarily Dunhuang, to acquire numerous Buddhist scriptures and other cultural artifacts. The Dunhuang manuscripts are among the greatest discoveries in the humanities in the 20th century and are studied today in the field of Dunhuangology.

The documents excavated from the Western Regions are said to number more than fifty thousand works in the world and belong to four major collections in China, the United Kingdom, France, and Russia. The core of the Dunhuang manuscripts in the collection of the Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences was acquired by the second expedition to Turkistan by Sergey Fyodorovich Oldenburg (1863–1934) from 1914 to 1915 and numbers approximately 20,000 documents including small fragments. Most of these artifacts consist of scriptures written in classical Chinese, and also include the Chinese classics, prayers, ceremonial procedures, temple records, and literary works such as lectures on scriptures and poem anthologies, which date from the fourth to eleventh century. There are also texts written in Sogdian, Uygur, and Tibetan. These sources have played a large role not only in Buddhist studies but also in fields such as Sinology and East Asian Studies.

Chapter. 4 Khara Khoto

Khara Khoto, which means the "Black City" in Mongolian, was one of the central cities of the Western Xia dynasty (1038–1227) built by the Tanguts at the southern end of the lower reaches of the Ejin River, in an area approximately 800 kilometers northwest of present-day Yinchuan, the administrative center of the Ningxia Hui Autonomous Region in China. During the Western Xia dynasty, the Tanguts fostered a culture that was based on Buddhism by creating a unique character system, known as the Western Xia script, that was similar to, though more complex than, *kanji*. The Western Xia script was used for general writing as well as to transcribe voluminous sets of the Chinese classics and Buddhist scriptures. This language all but disappeared when Genghis Khan (1162–1227) brought down the Western Xia dynasty, which had lasted over 190 years.

In the early twentieth century, the Russian expedition rediscovered the culture and language of this lost dynasty. Pyotr Kuzmich Koslov (1863–1935), who led the Mongol-Sichuan expedition from 1907 to 1909, discovered Khara Khoto on the riverside of the Ejin in the Gobi Desert and obtained numerous cultural artifacts. The Tangut-Chinese bilingual dictionary *Fan-han heshi zhangzhongzhu* and the book of *Zhuangzi* annotated by Lu Huiqing (1032–1111) are the most renowned rare books of the over six thousand Western Xia literary sources discovered in Central Asia by the Russian expedition, including Buddhist sutras and texts written in the Western Xia script as well as classical Chinese books.

【注 記】

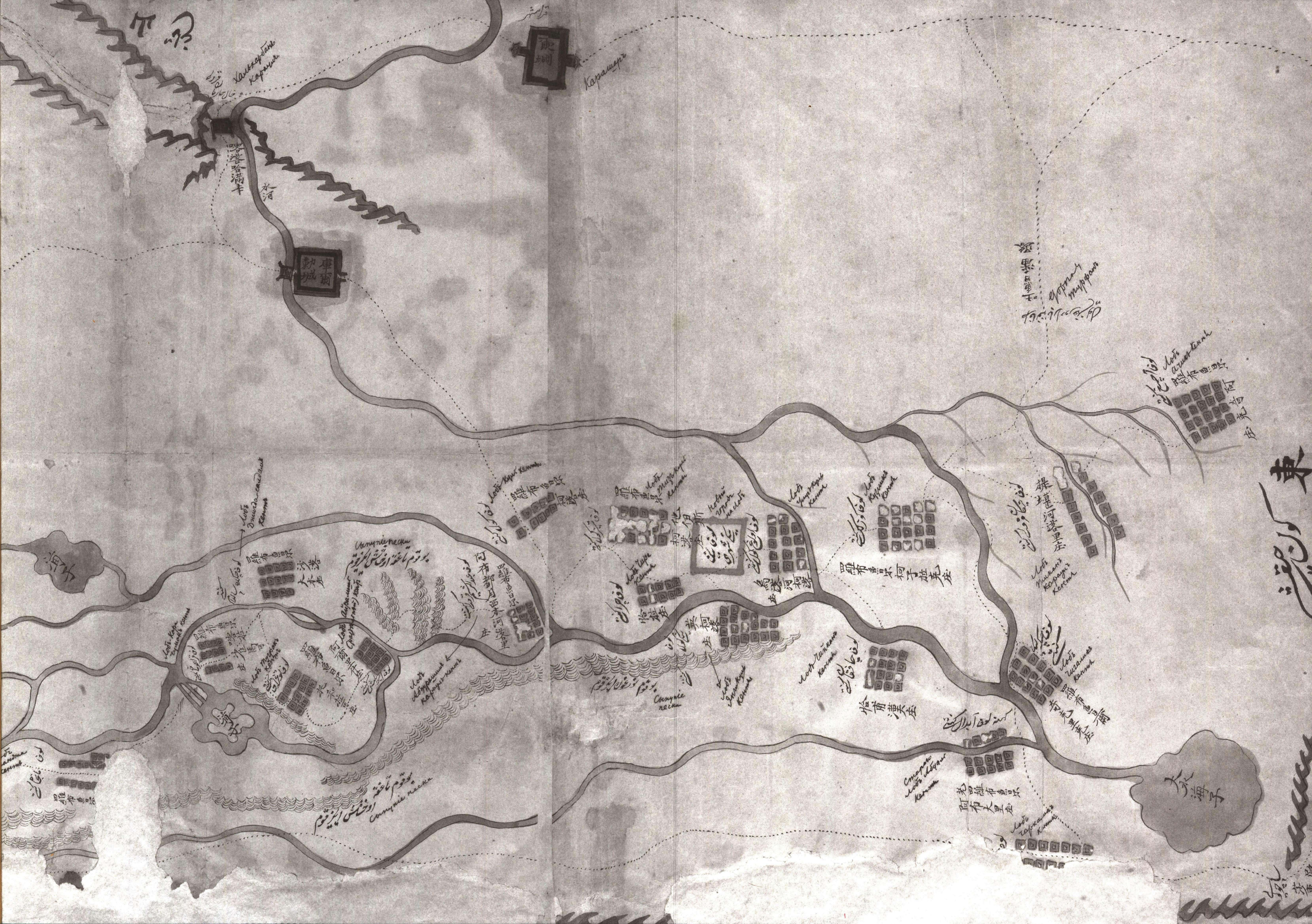
この特別展覧会に出品された作品の大部分は、2008年12月から2009年4月まで、サンクト・ペテルブルクの国立エルミタージュ美術館で開催された「千仏洞：ロシアのシルクロード探険隊」に出品されたものだが、これに本展用として東洋写本研究所所蔵の漢文写本約20点を加えた。
作品解説のうち、高田担当部分については、上記のロシアにおける展覧会の図録のものを自由なかたちで利用させていただいたものが多い。同図録では、インド・イラン語はヴォロビヨヴァ・デシャトフスカヤ（М.И.Воробьева-Десятовская）、ウイグル語がトゥグシェーヴァ（Л.Ю.Тугушева）、西夏語がクチャノフ（Е.И.Кычанов）、漢文がポポヴァ（Ш.Ф.Попова）各氏の担当であるが、インド・イラン語と西夏語についてはこれらに負うところが特に大きい。ただ明かな誤りについては、訂正に勉めたことはいうまでもない。それに関連して森安孝夫氏（M.T.）、Georges-Jean Pinault氏（G.-J.P.）からは幸いに専門的立場から貴重な御意見を頂戴することが出来たので、それを反映させた。
ここに謹んで感謝を表明しておきたい。（A.E./T.T.）

Most of the works in this special exhibition come from the State Hermitage Museum exhibition *The Caves of a Thousand Buddhas: Russian Expeditions on the Silk Road*, held from December 2008 to April 2009, except for some twenty Chinese manuscripts from the Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences. Descriptions of works by Professor Takata refer extensively to the Hermitage exhibition catalogue, in which the following contributed: M.I. Vorobeva Desiatovskaia (Indo-Iranian); Lilia Yusufzhanovna Tugusheva (Uygur); Evgenij Ivanovich Kychanov (Tangut); and Irina Popova (classical Chinese). We, the editors of the Kyoto National Museum exhibition catalogue, also acknowledge the invaluable views of Takao Moriyasu (M.T.) and Georges-Jean Pinault (G.J.P.) in compiling our catalogue. Any errors, however, are entirely ours. （A.E./T.T.）

特別展覧会
シルクロード 文字を辿(たど)って ——ロシア探検隊収集の文物
2009年7月14日

編　　集　京都国立博物館
デザイン　谷 なつ子
印　　刷　野崎印刷紙業株式会社
発　　行　京都国立博物館
〒605-0931 京都市東山区茶屋町527

京都国立博物館
©2009 Kyoto National Museum
ロシア科学アカデミー東洋写本研究所
©2009 The Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences, St. Petersburg

用　紙
表　紙：きらぴき 白　四六判 PL-180
見返し：シープスキン　古色　四六判 80.0kg
本　文：トリバイン　シルク　菊判 76.5kg

＊これは、科学研究費補助金　基盤研究（A）「日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察」による研究成果の一部である。